

60370

教科書文庫

6
810
46-1949
01304 49680

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

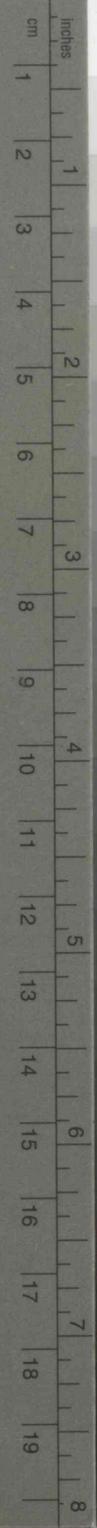


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



謹
教育文化研究会編

文部省検定済教科書

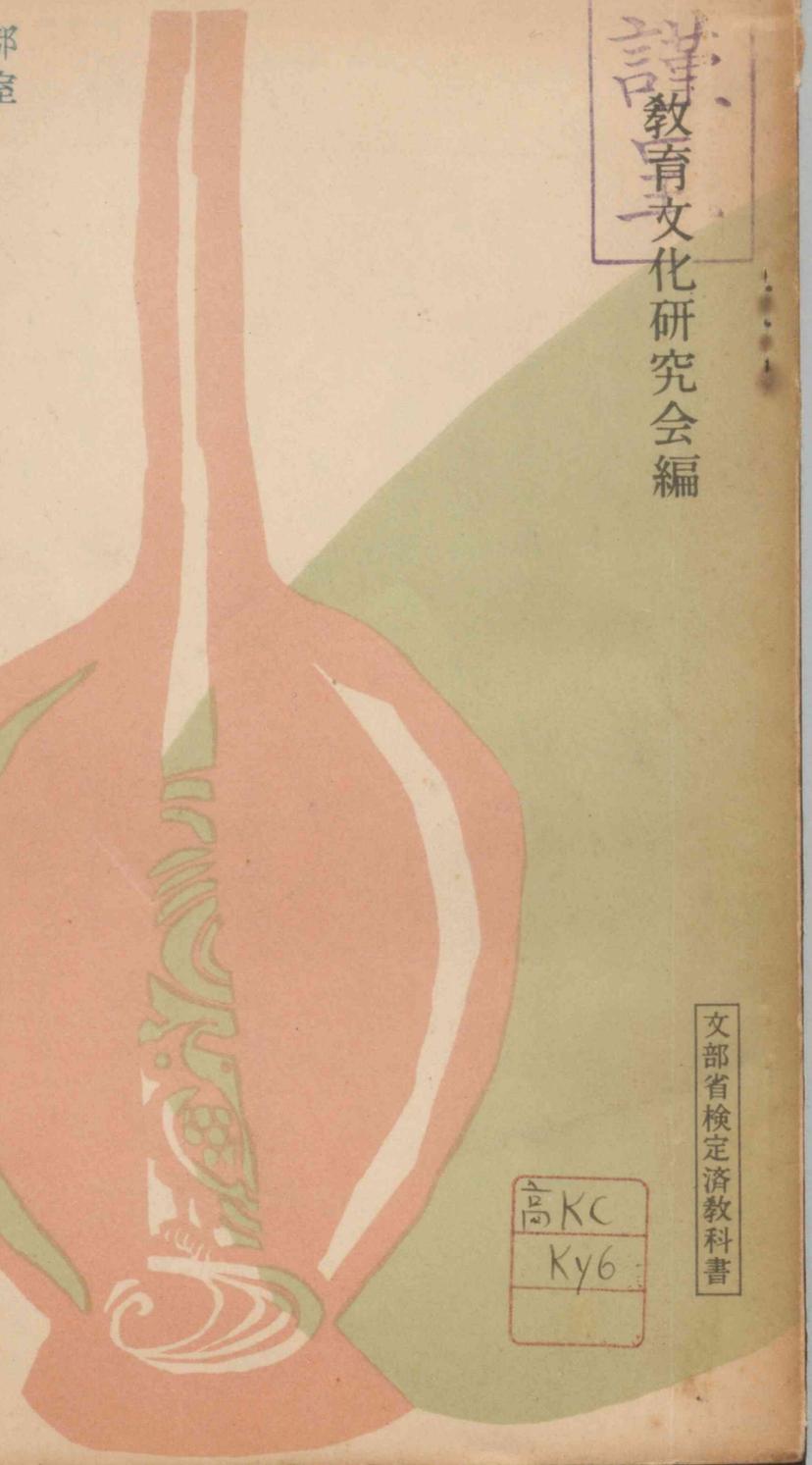
12 KC
Ky6

教育部
資料室

國語

高等學校
第一學年用

一



「國語」は中学校から高等学校へと一貫して編集し、
高等学校生徒の心理的發育に應ずるようにあらゆる
面に苦心を拂った理想的なものであります。

本書の特色

- 新教育の理念と國語科の使命に鑑み、實際教育家の体験に基づいて編集しました。
 - 國語學習の指導目標を全面的に達することができます。
 - 單元の組織に役立つような工夫がしてあります。
 - 學習活動の發展に資するための解説を豊富にいれてあります。
 - 文化の各領域に亘る廣い視野に立つて興味深い教材を集めてあります。
- ◎教師用指導書「指導の研究」完備。本書御採用校に贈呈。

広島大学図書

0130449680



昭和二十四年十月十日
文部省檢定済
高等学校國語科用

國語

高等學校
第一學年用

一

教育圖書株式會社

廣島大學
教育學部圖書

目次

○詩

一 春……………百田宗治…一

○ボエツイ

二 春 四 月……………グー尔蒙…四

三 うぐいす……………倉田潮…六

○放送

四 ラジオのことば……………波多野完治…二

五 競技会(放送台本)……………一六

○自然と文化

六 上高地へ……………田部重治…六

七 文 化……………安倍能成…六

○古典

八 奥の細道……………松尾芭蕉…四

九 芭蕉を読む……………島崎藤村…五

○映画

一〇 映画性の発見……………津村秀夫…六

一一 トンネル……………笠原良三…六

詩

若々しい力に満ちている春、身も心も伸びてゆくような感じを受ける。高等学校における國語の最初に、われ／＼は詩を味わって新しい季節の感覚をくみとろう。

一 春

百 田 宗 治

百田宗治は、明治二十六年（一八九三）大阪で生まれた。詩人。兒童文学者。著書には、詩集に「最初の一人」・「風車」・「静かなる時」・「冬花帖」、その他「詩の鑑賞」・「綴方の世界」・「炬辺詩話」などがある。

山から落ちてくる風のなかに

わたしは立っている、

土は冷え

樹は枯れている、

草の葉は黄いろく朽ち、

いちめん霜にとじこめられている。

あゝしかし、この土の下で眠りをさます春、
草木が芽ぐむ春、

——そこに培つちかわれている力、
いま土は陽を吸ひっている、
貯たくわえられるだけ貯えている、
が、やがてかれらはそれを吐き出す、
かれらの幼児が首をもたげる、
世界が陽でいっぱいになる。

いまわたしは土に根を置く一本の樹だ、
伸びようとして、ちびくまっている一本の樹だ、
しかしあゝ、そのなかから芽ばえてくる力、
ほんとうの人間の力、
あらしをつらぬき、風雨に耐え、
それを越えてゆく力、
その内部での間断ない苦しみ、
あえぎ——。

わたしの魂はしずかにめざめる、

わたしの血は土のものを感じはじめ、
あゝいまわたしは土に根を置く一本の樹だ、
その梢こぶをひろげて天にたち向かう一本の樹だ、
繁殖し、伸びてゆく一本の樹だ、
いま堅い土壤じよくちの下に芽ぐむ一個の種子だ。

身をさる西風はあおる炎だ、
山から落ちてくる風は燃える神火だ、
土は裂け、樹はさげぶ、
森羅万象が魂を持つのだ、
地上回復にたちいでるのだ。

〔ぬかるみの街道〕による

研究の手引

- 一、この詩の朗読をくふうする。
- 二、作者の詩情は、「春の樹木」を中心にして、作品にどう表現されているだろうか。
- 三、この詩を読んで得た感想をめい／＼発表する。
- 四、「春の自然」に取材して、めい／＼詩を作って発表する。

ポエジイ

作品のうちに流れている詩情は、その作品を読む人々に、あるときは喜びを與え、あるときはしみぐとした情緒を感じさせる。

作品の持っている本質的な詩情、それをポエジイといっている。「春四月」「うぐいす」の二編のうちにポエジイをさぐり、読む楽しみを味わい、豊かな人間性を築いていこう。

二 春 四 月

グールモン

グールモン (Remy de Gourmont) は一八五八年フランスで生まれ、一九一五年に没した。象徴主義の批評家。詩・小説・戯曲などにもすぐれた作を残している。著書には、「エビローグ」・「仮面の書」・「フランス語の美学」・「文学的散歩」などがある。

シモオン、太陽はひいらぎの葉の上に笑い、

四月はまた帰ってきた、私たちと遊ぶため。

四月は肩の上に花かごを載せてくる、

四月は花を野ばらにやる、つるばみにやる、柳にやる。

四月は野の草の間に、一つ／＼に花をまく、

小川の岸へも堀ばたへもみぞのふちへも。

四月はふさわしい場所で枝を伸ばさせるために、

水のためには浮草を、森のためにはしゃくなげを

除けておく、

四月は木陰へすみれの花をまき散らす、木いちご

の木陰に、

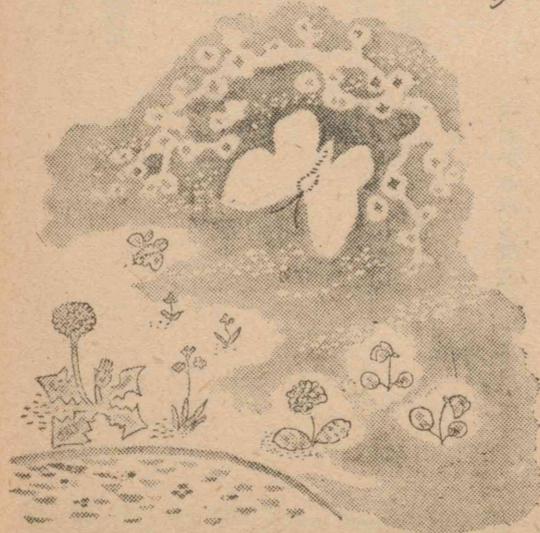
四月は勢いよくはだしの爪先ですみれの花をかく

し、すみれの花を埋める。

四月はあらゆる牧場にひなぎくをやる、

鈴の首輪をしたさくらそうをやる。

四月は森の清らかな小徑に沿うて、



すいらんとアネモネをこぼしてゆく。

四月は家々の屋根にかきつばたを植えもする、
そうしてシモオン、日あたりのよい私たちの庭に。

四月はきておだまきと花すみれとヒヤシンスと
ちょうじのいいにおいをみなぎらせる。

(「月下の一群」堀口大学の訳による)

研究の手引

- 一、作者は、春の自然を作品にどう表現しているか。
- 二、四月の花を中心にして、フランスの春と日本の春とを比べてみる。
- 三、この詩に感じられるポエジイについて、めい／＼の意見を発表する。

三 うぐいす

倉 田 潮

倉田潮は大正から昭和の初期にかけて新聞・雑誌に短編数編を発表した。こゝに採録した「うぐいす」は昭和五年四月報知新聞に発表されたものである。作者の生地・生年・現況などははっきりしない。

隣村の小学校へ通う途中に、深い森がある。春、櫻の花のまだ咲かないころ、私は毎朝その森の同じ場所であぐいすの声を聞いた。初めはよい声に聞きほれるだけだったが、しまいに捕ってやろうという氣になって、日曜の朝、とりもちのついた竹ざおを持って森に忍び込んだ。

遠くからうかざうと、うぐいすは芽のふくれたくりの木の枝を渡りながら鳴いているのだった。私は足音と息をこらしてそこに近づいて、そつとざおを差し出した。逃げない。二度さしそくなつたが逃げない。三度めに、私は胸をときめかせながら竹ざおを手もとにあやつた。うぐいすがもちにからまつて叫びながらもがいていた。

私はざおをほおり出してあぶのように一直線に、野路みちを家に走り始めた。手にはうぐいすのかすかな体温とおびえた胸ぶるいを感じていた。が、私はうぐいすをあわれまなればかりか、かえってそのうぐいすが数十円で賣れる場合を想像して、走りながらうれしさに飛び上がった。

私の父は村のいなか医者だったが、以前から——今でもうぐいすを一羽飼っていた。その父から聞くところ、うぐいすのよく鳴くものは数十円の値がするとのことだった。私は走りながら手に持ったうぐいすを見た。そして、びっくりしてそこに立ち止まった。

うぐいすはめくらだった。生まれながらのめくらであるらしく両眼ともひとみが白い膜におわれ
ていた。

父はめくらのうぐいすを見ると、はなしてやれと言った。が、逃がしてやる氣にはなれなかった。かごに入れずも餌を與えて、父のうぐいすと並べて軒につるした。めくらのうぐいすは餌づかなかつた。餌が見えないのだった。さびしげに隣のうぐいすと呼びかわして鳴いていたが、次の日見るとげつそりとからだに弱りがきいていた。

そのとき、私はふしぎなことを見た。父のうぐいすが口にすり餌を含んで、格子の間からくちばしを差し出してめくらのうぐいすを呼ぶ。と、めくらのうぐいすは幼鳥のように大きい口をあけて声のする方に進んで行く。興えられたものを受ける気かもしれない。

私は試みに父のうぐいすのかごにめくらのうぐいすを入れてやった。と、父のうぐいすが、驚くべきことに、めくらのうぐいすを養うではないか。それはちょうど親鳥が巢の中のはだかびなに餌を興えるのによく似ていた。私は父を呼んで、黙ってかごをさし示した。父もあされたように目を丸くして不可思議に見とれた。

夜になってから、父は私に向かって、いったいにうぐいす科に属する鳥は弱少で、他の鳥にしいたげられるだけ、相互扶助の觀念が発達していて、ひななどは他科の、別科のひなでもおのれの子として育てるものだという話を話した。たぶんそういう性質から、めくらの友を養う氣持になったのだらう、と。

私はそれからひじょうにうぐいすがかわいくなった。学校から帰って来ると、かごを両手にさげて森の空気を吸わせに行った。森にはいるとうぐいすは急に勢いづいて、朗らかに高音を張った。しかし、ある日若草の上にかごを置こうとすると、枯枝にひっかゝってとびらがあいて、めくらのうぐいすに逃げられてしまった。父とともに夕方まで森のすみぐまでも捜したが、うぐいすは姿さえ見えなかった。

次の土曜日の早引けに、私が森を通りかゝると、父が思いがけなく新緑のくさむらの中にたゝずんでいた。洋服にかばんをかゝえているところをみると往診の帰りらしい。私を見ると「おいでおいで」をして、黙って森の奥の方へ歩きだした。私も鉛筆入れをかたこと鳴らしながら、黙ってあとについて行った。

暖春のしんと静かな正午だった。頭の上には銀色にとけた太陽が煮えている。が、その間に紅や黄色の若芽が幕を張っているので、光はわずかに新緑の下草に波紋を織り落すにすぎなかった。

「静かに。」

立ち止まって父が目をけわしくしてみせた。私は鉛筆入れのがたゝするかばんと、はずむ息をおさえて忍び足に歩いた。

(あれを見る。)——そう言うように父が指さしをした。まっかな芽を化粧した大きい古木の木末だった。針のような日の光のまぶしさに、すが目をしてながめると、羽をふくらませた小鳥がうごくまっている。——あの、めくらのうぐいすだった。

「あれ。」

私は思わず低く叫んだ。父が私の肩をおさえて、静かに、との意味を示した。めくらのうぐいすが今まで生きていたことは、大きい驚きだった。餌が見つからないからとうに死んでいるだろうと、私は考えていた。

うぐいすを見つめて、くさむらに身をかくしていると、あたりが死のように静まりかえっているのに気がついた。夜のうしみつ時のおもてに「眞晝の魔が時」という沈黙のふしぎな時刻があると聞いたことを思い出した。うぐいすも静寂の中に丸くうづくまって動かなかった。眠っているのかもしれない。

ない。ふしぎな静けさの中で、私は森の奥の暗がり白い豆電氣を飾っているすいらの花をぼんやりと見ながら、若草のかおりにからだの染まってしまうのを感じた。

とつぜん、木末のうぐいすがチ、チ、チと叫びながら、幼鳥のように空に向かって大きく口を開いた。瞬間に私はめくらのうぐいすを養うものが、近くに來ていることを知った。同時にそれが父のうぐいすのような慈悲に富んだ他のうぐいすであらうと想像した。が、それはうぐいすではなかった。うぐいすよりはるかに小さいおがらという青い羽に黒いくちばしをもった美しい小鳥だった。おがらは羽ばたきながら口移しに餌をうぐいすに與えると、体をすりつけて同じ枝に並びあつて止まった。そして、母親のようにうぐいすの羽をくちばしでとかし始めた。うぐいすはされるまゝにまかせて、安心してじっとしている。赤い芽の中に並びあつた青と灰色の小鳥の翼に、春の柔らかな銀の光線が流れた。

四つの賛嘆に輝く目は、今なお二羽の小鳥を見つめていた。

私もちろでさした前にも、いや、生まれたときから、このうぐいすはいろ／＼な鳥に養われてきたのに相違ない。さもなくばめくらの鳥は今まで生きていられるわけではない。私は――父も今はうぐいすを捕らえる氣にはなれなかった。そればかりか、美しい森の道德に魅せられて石のように黙りこんでいた。

どこか遠くでこまどりの鋭い声がした。しじゅうがらの群れが鈴を鳴らしながら、しだいに近づいて來るのも聞えた。森は今、眞晝のふしぎな眠りから、目ざめようとしているらしかった。

(「驚」による)

研究の手引

- 一、「うぐいす」全文を読んで感じたポエジイをめい／＼発表する。
- 二、すぐれた表現と思われるところを書きぬいてみる。
- 三、次のことばはどういう意味に使われているのだろうか。本文について説明する。
 - (イ) 波紋を織り落す (ロ) 美しい森の道德 (ハ) 眞晝のふしぎな眠り
- 四、小動物を飼った経験があつたら、それを題材として作文する。(六百字以内)

放送

われ／＼はふだん用いていることばについて、とかく無関心な場合が多い。しかし「聞く」ということと「話す」ということが、われ／＼の日常生活のうえにどれほどたいせつなことであるかと考えるとき、われわれ自身の聞き方や話し方について反省を加え、ことばに対して、正しい感覚を持たなければならぬことに氣づくのである。とりわけ、われ／＼はラジオを通じて、毎日「聞く」という経験を重ねる。学校生活においてもマイク・フォンなどの機械を使って放送する場合がだん／＼多くなってくることだろう。次の二編を手がかりとして「放送」に対する理解を深め、はっきりと話し、正しく聞くという態度を養っていこう。

四 ラジオのことば

波多野完治

波多野完治は、明治三十八年(一九〇五)東京で生まれた。心理学者。著書には、「児童心理学」・「教育心理学」・「文章心理学」・「現代心理学研究」などがある。

ラジオの用語や文章などについても、よく氣をつけてみると、いろ／＼な問題があるものである。わが國の放送を聞いてみると、放送者がおしぜいに話をしてるように聞える。ちょうど大きな演説会場で話をする場合のもっと大規模なもののように考えて、アナウンサーや講演者がしゃべっているのではないかと思える。しかし、本来ラジオはそんなにおしぜいで聞くものではない。ラジオの聴取者全体としては何万という数にのぼるのであるが、しかし現実にラジオを聞くのはごく小人数ずつである。家庭が單位になつて聞くのである。アポットという人の「放送必携」という本を読むとアナウンサーは座談をするつもりで放送をやらなければいけないと書いてある。二、三人か五、六人の人を集めてちやうど茶飲み話をするように放送するのが、どんな放送であつてもいちばん成功するのだ、と書いてある。

この議論にはもちろん反対も成りたつのである。われ／＼は、ラジオを聞くのはたしかにひとりあるいは数人であるが、しかしわれ／＼の心の中には自分のほかに何万の人が聞いているのだぞ、という意識があるではないか。ちやうど新聞を読むのはひとりひとりで読むのだが、新聞の読者というものは、「群集」であるのと同じように、ラジオもじつさいに聞くのはひとりひとりであつても、聴取者全体としては、群集的な意識があるのではないか、というような反対論はその最も有力なものであろう。しかしわれ／＼はラジオの放送用語に影響されて、しらずしらずそのような講演会の聴衆的態度をとらされているのかもしれないのである。ラジオの放送が会話体で、または座談ふうに行われれば、われわれは講演会場にいるような氣持をもたないのに、今のラジオの放送はすべて講演口調・演説口調だからそれが習慣となつてわれ／＼はそんなふうに関心されてしまつているのかもしれないのである。

人の實際の声をとおして聞くというのにはそれだけの利益がなければならぬ。本を読めば五分で読めるのを、二十分も三十分もかゝつて話されるというような放送は「放送」というものの存在形式をじゅうぶんに利用しているとはいわれぬ。人の口から直接に聞いてはじめておもしろみのあるような話が、聴取者は聞きたがっているのではあるまいか。人の口から直接聞いてはじめておもしろい話というのはなんといっても座談である。

野球の放送は日本ではいちばん研究せられたものの一つであらう。またいちばん成功した放送種目でもある。前記のアポット氏の本によると、フットボールの放送は

- 一、だれがたまを持つていたか。
- 二、それはどんなプレーであつたか。
- 三、だれがタックルしたか。
- 四、ボールはどこまで進んだか。

という四つが常に聴取者の心にうかんでくるように放送しなければならぬのであるというが、それは野球放送についても同様であらう。今たまがどこにあるか、だれが今プレーをしているか、だれが守備行動を起しているか、だれが何壘まで進んだか、の四つが必要なのであらう。

しかし文章上からみて興味があるのは放送者のテンスの使い方である。これについてアポットは、リー・キプークという人の説をひいて、なるべく現在形を使うことを勧めている。見ている前ではプレーが済んでしまつていても、放送のときはそれが現に行われているように話した方がいいというの

である。

「ハードは右側へまわりこもうとしました。」

と言わずに

「たまたハードの手にあります。ハードは右側へもぐりこもうとしています。」

と言う。だから、ときとしては進行形を使った方がいいことがある。だれかタックルされたときは時刻を過去にした方がいいという。これはタックルによってスピードなプレーが中断され、そこでゲームのスピードに変化が起るわけであるから一段落つけるのである。

野球の放送はそのつもりできいてみなければなんともいえないが、進行の早い一瞬で済んでしまう動作のときは「た」が使われ、進行がそれほど早くない動作のときは「おります」が使われるようである。

これは現代口語では過去の助動詞が半過去の助動詞と一つになってしまい、すべてを「た」で表わすことになったためであろうが、アナウンサーが過去と現在とをどのように使い分けて、情景を目に見えるように写しているかを、きいてみると、また別の興味があるであろうと思う。

野球放送では名詞止めの文章が多い。「打ちましたがファウル。」「投げました、ボール。」などこれは情景を最も端的に聴取者の心に印象させる方法で、日本流において特に有効に使用される表現手段であろう。英語だつてとき／＼ないことはないが、日本のスポーツ放送には特に多いので、このような名詞止めの放送文章を考案した当年のアナウンサーM氏の功績はたゞえられてよい。

いっぽんに放送においては文章は特に短くなければならない。日本語では同音異義の語が多いので、アナウンサーもこの方に氣をとられて文章形態まで手がのびない形であるが、將來はこの方面まで心をいたす必要がある。文章は短くて、しかもだいたいしなことを先へ言わなければならない。こゝにラジオの話し方の特性がある。

ふつうの話だと何遍もくり返して言ってもいいし、また相手のそでをつかまえて、まあ話を終りまで聞いてくれということもできるのであるが、ラジオではいやならスイッチをひねってしまうのであるから、結論というか、たいせつなことは先へ出してしまわなければならない。放送者はスイッチをあける権利はないのである。日本流では付属文が先へついて主文があとへくるのであるが、このような構文の國語では、文章は特に氣をつける必要がある。付属文をゆつくりやっついてその間にスイッチを切られれば、放送者の言いたいことはまるで曲解されなければならないのである。

以上のようなことを頭において放送を聞いてみると、それだけでも文章の科学的修練にとって相当利益になるであろう。また放送を味わうには、この辺まで氣をくばらなければ、本当の放送のおもしろみはわからないのである。

(雑誌「むらさき」による)

研究の手引

一、講演の放送、スポーツの実況放送などを聞いて、話し方を調べ、その特徴について話しあう。

二、次の場合にはどういふ話し方がふさわしいかを考え、めい／＼意見を發表する。

(イ) 相手がひとりの場合。(対話)

(ロ) 相手が数人の場合。(座談・討議など)

○ 放 送

(ハ) 相手がおまぜいの場合。

a 相手を前にして。(研究発表・生徒会など)

b 相手が目の前にいない場合。(校内放送など)

三、ラジオの放送を聞いて、次のことに注意し、めい／＼の話し方の反省をする。

(イ) アナウンサーのことばの発音と速度。

(ロ) アナウンサーのことばの抑揚と調子。

五 競 技 会

— 放送台本 —

この脚本はN・H・Kより学校放送として中学校・高等学校に放送されたものである。この台本を読みながら対話や実況放送を場面の移動にしたがって自由に使用して組み立てている放送台本の形を研究し、学校での放送の場合の参考にしよう。

アナウンサー 学校放送中学・高等学校の時間です。

音 楽 テーマ 完奏

完奏
一つの曲が
全部演奏さ
れる。

アナウンサー 毎週月曜日この時間の連続放送番組「新しい学校」の本日の番組はN・H・K脚本部作の「競技会」でございます。学校内の運動競技の計画はいかにあるべきか、他校との対抗競技にはどうすればよいか、競技会についてのいろいろの問題をさようはロードレース大会の実況放送を通じてお知らせいたしましょう。

FI 音 楽 行進曲ふうなもの FI — UP — DOWN

アナウンサー 風かおる初夏の空あくまで青く、中仙道の舗装道路は夜來の雨にふき清められ、これ

UP 音が高調な

Down 音が低くなる。

あざやかにひかれたスタートライン、目にしむ白い線を前にして、参加校二十六の代表選手は、既にウォーミングアップを終って、スターターの合図を待つばかり、四十キロの全コースを十人の走者に受けついで、決勝点、武蔵の國一の宮、氷川神社の境内のテープを切る。大会の栄冠ははたしてどの学校の選手の頭上に輝くことでありましょう。

SE 音響効果

SE 音響効果

biz 複雑な音の

アナウンサー 駅前通りへ出るまでの二、三百メートルの大通りの両側には、赤・白・青、それ／＼の小旗を打ち振る参加校の應援團はもちろん、町の青年團・ボーイスカウト・スポーツファンに埋めつくされ……あ、スターターK氏が出てまいりました。陸連指導員、かつてのオリンピック選手で名スターターとうたわれたK氏のビストル高く上がりました。

声 (エコー) 位置について、

声 (エコー) 用意、

SE 号砲

SE 歓声 — 五秒 — FO

アナウンサー ロードレースの実況はいずれのちほどお伝えいたしますが、さようは「競技会」のありかたについてお知らせすることになっておりますので、ちょうど地元の高校の陸上競技部主將の

船山幸一君がみえていられますので御意見をうかがってみることにいたしましたよ。

男生徒 ……船山さん、船山さん。ちょっと。

船 山 やあ、こんにちは。ごくろうさまです。

アナウンサー ごくろうさま、船山さん。きょうは出ないんですか。

船 山 ぼくなんかいつも縁の下の方で。

アナウンサー だって、船山さんは長距離ランナーだし、キャプテンでしょう。……それともおんた
いがわざ／＼出場しなくとも勝てるというんですか。

船 山 (笑って) まあ、そんなことにしておいてください。うちの学校では選手が多すぎて選ぶに
困ったくらいですからね。

アナウンサー と申しますと、陸上競技部の選手はみんなで幾人ぐらいなんですか。

船 山 さあ、幾人ぐらいといって……全校生徒が陸上競技をやるといってもいいくらいですよ。
昔はよく十人十五人の選手だけで広いトラック・フィールドを専有して、学校の運動といえば限ら
れたわずかな選手で代表されていたようなものでしたね。ところが今では、野球のシーズンには野
球を、ラグビーのシーズンにはラグビーを、各人が一つの運動にかたよらず、一年じゅうを通じて
平均に運動を続けるようなくみになっていっていますよ。

アナウンサー 水泳部の選手が冬になると河童かまぼこが陸に上がったようにぼんやりしているということも
なくなつたわけですか。

船 山 ええ、きょうのレースの第三走者の高石君は水泳部ですよ。野球部の選手にも出てもらっ
ています。ファーストバッター千葉君が、きょうのレースでやはり第一走者です。ぼくはね、学校
の運動競技はこれがいいと思うんですよ。

アナウンサー よそでちらつと耳にしたんですがね。船山さんのひきいる陸上競技部は理想的に運営
されてきたと聞きました。野球部の方には何か問題があったんじゃないやせんか。

船 山 いや、野球部の方もなか／＼よくなりました。学校では集委員会で「スポーツマンシッ
プとは何か」という討論会をひらく、生徒協議会では「運動部制度の改革」という議題で民主的な
運営を研究するとか、新学期以来うちの学校ではいろ／＼研究を続けていますよ。

アナウンサー お宅の学校も野球はこのところ負け続けですが、この夏には久しぶりに奮起して、ぜ
ひ甲子園こうしんまで出かけてもらいたいですね。

船 山 だいじょうぶですよ。野球部も他校との対抗競技あての練習から、校内の対抗競技を盛
んにして新人を発見しようという方針に変わりましたね。このあいだのホームルーム対抗野球大会
には、すばらしいホームラン打者を掘り出しましたよ。

アナウンサー ほう、それは楽しみです。よろしかったら名まえを発表してくださいよ。何年生。
船 山 一年の山田道夫というんです。それがひにくにも、うちの学校と敵どうしの第二高校の山
田ビッチャットの弟なんですからね。

アナウンサー それはそれは、……勝敗この一球で決するの時、兄の一投、弟の一撃、三振で打ちと
るか、ホームランで報いるか、これは野球小説を地でゆくというところですね。

船 山 あ、あのサイドカー、第二高校の應援團です。あれに乗っているのが兄さんの方の山田ビ

ッチャーですよ。

アナウンサー それはちようどい。

SE サイドカーの爆音 FI — UP

アナウンサー 山田さん、山田さん、ちよつと。

SE サイドカーの爆音 とまる

アナウンサー 山田さん、ちよつと。競技会の計画・運営についておさきしたいんですがね。

男生徒山田 さあ……。これから千住大橋の第四中継点まで連絡に行くんですがね……。きょうは應

援團長というこわい役目を仰せつかっていますんで……。

アナウンサー あ、千住大橋それはいい。そこから中継放送することになっているんですがおさしつかえなかったら乗せて行っていただけませんか。

山 田 この車にですか。え、どうぞどうぞ。連絡に行くだけであとは暇ですから、向こうでいろいろお話をたしましょう。

アナウンサー じゃ、乗っけていただきますか。

SE サイドカーの爆音 始動 — UP — FO

SE 川蒸氣の汽笛、ぼん／＼という爆音

山 田 やあ、すっかりお待ちせして、着きましたよ……。もう私の役目はすみましたから。

アナウンサー マイクの方はさつきからぼん／＼蒸氣の音ばかりでたいくつしているところですからさっそくマイクへ出てくれませんか山田さん。お宅の学校はこの中継点では何番でしたか。

山 田 おかげさまでトップで通過ですがね。ぜん／＼予想がつかんのですよ。船山さんこの選手が、うちの選手の後へびつたりくつについて、ふりさろうと思ってもはなれんらしいんですよ。

アナウンサー もう甲子園の予選もま近なんでしょう。應援團長なんかでとんで歩いていいんですか。

山 田 どういたしまして。ピッチャーだ、キャプテンだつてお高くとまっているようではない球はほうれませんよ。ぼくは野球部の選手にはいつも言ってるんですがね。野球選手だからつて学校へ野球をやりにくるんだと思つてはお、まちがいだつて。

アナウンサー たしかにそうですね。学生野球のよさはそこにあると思ひますよ。それから、これは私個人の感想ですけどね、最近、中学や高等学校の運動競技の大会があまりに多すぎて、たとえば野球大会にしてから、毎日曜ごとにどこかに催されているようですが、これについてはどう考えていられますか。

山 田 そうですね。対抗競技にだけ力を注ぎますと、どうしても選手偏重になりますから、どこまでも校内の競技会に主眼点をおきたいと思ふんですよ。全国大会に出場するために長い間学業を休んだり、新聞社の宣傳があまりに露骨にみえすぎる大会も、選手や学校の虚栄心をそるだけで、正しい運動精神とは縁遠いものになるんじゃないでしょうか。

アナウンサー それに近ごろのように汽車賃や宿賃が高くなつてはその方からも考えなくちゃならんでしょうね。

山 田 野球部としてもそれは考えているんですよ。運動部の費用は全校生徒が、公平に負担して

アナウンサー まあそのへんの問題は心配ないでしょう。ほかならぬ山田さんがそのお氣持でやって

山 田 いやあ、どうも。
アナウンサー さてと、もうロードレースほどの辺まで行ってるでしょう。

山 田 そうですね……。えいと雨あがりできょうはみんな調子がよさそうですからもう第六……
第七走者あたりが走っているかもしれないよ。

アナウンサー それはたいへん……。さきまわりして決勝点で待っていません。

山 田 マイクは今度は氷川神社の一の鳥居ですね。あちらへいらしたら、ぼくたちの学校の詰
め所でお休みになったら。

アナウンサー ありがとうございます。氷川神社の参道でしたね。

山 田 えい、一の鳥居の下の学校のマークのついたてんまくですから、ぼくもすぐ出かけます。
おさきにいらしてお茶でも飲んでみてください。

アナウンサー ではあなたの学校のキャンプから放送させていただきますよ。お宮の森の山ばとの声
を聞きながらお茶をいただきますか。こりゃ冥利みょうりにつきますなあ。ではおさき……。

SE 山ばとの声、テテッポッポ 三声、四声。

SE 自轉車のベル。

アナウンサー おや、連絡員の自轉車ですね。(声をかける)もし〜戦況はどうですか。ちょっと
マイクに出てくれませんか。

連絡員 十時十二分二十秒、第十走者にバトンタッチ、去年の記録をわずかですが破っています。

アナウンサー それでアンカーはだれですか。選手の名まえは。

連絡員 キャプテンの船山さんです。

アナウンサー おや、船山幸一君……だって船山君はきょうは出ないという話じゃなかったんです
か。

連絡員 えい、そのつもりだったんですが、アンカーで走る事になっていた北村君のおかあさん
がゆうべなくなられたんですよ。

アナウンサー ほう、それで。

連絡員 それで、北村君、そのことを皆にかくしてきょう走るつもりで出て来たんですよ。船山さ
んがそれを聞いて、昔ならよく父の死を祕めて野球試合に出るとかいつて英雄的な行動のようにほ
めた、ええものだけでも、何もそんなことまでしてスポーツに殉ずる必要はないというんです。

アナウンサー なるほどね。昔はよく美談として伝えられたものですよ。妹の写真を胸に抱いてホー
ムランを打つとかいましてね。

連絡員 ほかの人ならともかく、ぼくが代わって走るからいいだろうって、船山さんがむりにおし
きって……。今とても元氣にやっていますよ。もうすぐ省線の陸橋あたりへみえるでしょう。

アナウンサー それで、二番はどここの学校。

アンカー
anchor
リレーの最
後の走者。

連絡員 第二高校のこれも陸上競技部のキャプテンの大山君ですよ。縣下の記録保有者ですよ。バトンタッチは船山さんわずかに早いくらいですからね、抜きつ抜かれつですよ、きつと……。

アナウンサー あ、先頭の走者が見えました。両側から青葉若葉の夏木立の枝さしのべてさわやかな風かおる氷川神社の参道を、先駆のオートバイや付き添いの自轉車の一團にかまれた先頭の走者の姿が見えました。ひとりはさつきスタートラインそばで、なにげなく私と談笑していた船山幸一君です。小柄のからだ、しなやかな四肢、丸い胸、長距離選手としては理想的な体格の船山君と肩を並べて走ってくるのは第二高校のキャプテン大山君でしょう。名は体を表わして六尺豊かの堂々たる体軀、ロングストライドで、ピッチの船山君に追いつき、二、三步ぬいたと思えばまた船山君に追いつかれます。いや、船山君が追い抜くのではない、彼は時計の振り子のように規則正しく自己のペースをまもって、腕を振り足を運んでいる精巧な人間機械ともいえます。大山選手は縣下千五百メートルレースのナンバーワンとさくがどちらかといえばスプリントのさく選手で、中継点でバトンタッチをするやいなや、ぐんぐんと船山君を抜いて一時は二、三十メートルをリードしたといいますが、そのむりがたくなって最後のコースを半ば過ぎる今、もうへとへとに疲れて船山君に追いつかぬのがせいぜいなのでしょう。応援團から歓声があがりました。

Out
音が消える
こと。

SE ビズ FI — UP — Out

アナウンサー 第二高校の大山選手はこの歓声に答えて残された最後の力をふりしぼり、二、三步ささんじている船山君に追いつきました。ようやく肩を並べた大山君の顔は土色に変わって、腕は振り上げる力を失って、額に流れる油汗をぬぐっています。追いつかれた船山君は奮闘に疲れはてた好敵手大山君の顔をふり仰ぎました。彼は右手に握っていたレモンの一片を大山君にさし出しました。これを口に含んでかわきを止めようというのでしよう。彼は疲労を回復し、かわきを止めるためにと、さっきの中継所から左手にバトンを、右手にレモンの実を握って駆けて来たのでした。

SE 拍手

アナウンサー ゴールを前にして渾身の力をふりしぼり、敢闘するふたりのアスリート、疲労に倒れんとする相手に友情のレモンを送った美しい情景に沿道に並ぶ数百の応援團はいっせいに拍手をおくりました。勝敗にこだわることなく、スポーツマンシップとフェアプレーの精神で戦うこと、南関東新制高校ロードレース大会のゴール寸前に見られたこの美しい場面をお伝えして本日の放送を終わります。

音 樂 FI — UP — Out

アナウンサー 中学・高等学校向け連続放送「新しい学校」の番組「競技会」を終わります。たゞいまの出演はA校とB校の皆さんでした。

音 樂 テーマ

(「N・H・K放送台本」による)

研究の手引

一、アナウンサーのことばについて、次のことを調べる。

- (1) 話の運びかた。
- (2) 相手の意見の引きだしかた。

- (3) 実況放送の説明のしかた。
- 二、この放送脚本に含まれているスポーツについての意見を簡條書にまとめる。
- 三、学校生活に取材して放送脚本を作る。

自然と文化

われ／＼は毎日を生きぬいてゆく。われ／＼の生活は、われ／＼のひとりひとりが、それ／＼特徴を持っているように、いろ／＼のすがたを持っているものである。しかし、われ／＼人間の営みがなされる場である自然という大きいものに、思いたるとき、われ／＼の文化と自然との間に、多くの問題が見いだされるであろう。

人と自然との交渉を中心にして、この課では「上高地へ」と「文化」との二編を讀んでいこう。

六 上高地へ

田 部 重 治

田部重治は明治十七年（一八八四）富山縣で生まれた。英文学者。東洋大学教授。著書には、「中世欧州文学史」・「心の行方を追うて」・「山と溪谷」などがある。

松本から五里の、「島々」にはじまる島々谷の林道が、まだ、切り開かれぬ前の上高地溪谷は、松本から平湯へ抜ける近道にあたっていたので、たゞわずかに案内を知る旅人のみが、たま／＼、島々から飛驒の平湯温泉へ越すために、七千尺の天空に馬の背のように連なっている峰続きの密林を五、六里も分けてこの溪谷へ下って、それから焼岳のすそを梓川に沿うてうねって行かなければならなかったのである。思えばその時分の梓川のものすごいほど清らかな流れを徒渉して、その冷たさにふるえながら、氷河の遺跡に満てる岳川の雪を穂高山の中腹にながめ、あるいははしらかば、からまつの心ゆくばかりあざやかな色彩を分けながら、雲のちぎれが低く樹間に迷っているのを見て心驚かされた旅人は、この溪谷の自然に、よそでは見られぬ印象的な鋭さと、わずかな雲のたゞすまいにもたえず不安をよび起す急激な自然の変化とを、どう身に感じて過ぎて行ったことだろう。

その後、島々谷に林道が切り開かれてから、深い／＼この溪谷は、潤いに満ちた島島谷を徳本峠の頂上まで四里登りづめの道と、峠から梓川畔の温泉まで二里降りづめの林道と、合わせて六里の山道を越えて達することができるようになった。松本から



六 上高地へ

馬車を駆って五里の島々に達して、それから島々谷にはいると、もう清流岩をかひけしきははじまるのである。初めのうちは溪谷の両側の狭れる斜面には、ところどころ桑畑が散在しているのが見られるのであるが、おい／＼高い山があとからあとからおわれかゝって、今までのところどころ植林を施してあった所や、畑を作った斜面は、おのを入れぬ処処女林とうって変わり、とち／＼かつらぶなの大木が碧藍の流れの上に茂りあつて、幾層の潤葉は激しい水勢にふるえおの／＼している。谷はます／＼狭ってくるばかりで、仰ぎ見れば見るほど、深い山相は、さして行くかなたの面影をしのばせる。とき／＼迫りあう山と山との切れめが、溪谷の分かれを暗示して、今にも道が流れから遠ざかつて峠にかゝりそうに考えられるが、幾度かこの希望が裏ざられたことを感ずる。潤葉樹がおい／＼針葉樹に変わり、道はおい／＼登りつめて、流れの音が後に遠くなるときに、あとより返って、峠の頂上から右手の方、遠くはるかに鬱蒼として高く島々の方へ長く天空を限っている峰を見て、あれこそたゞいま登ってきた、林道のなかつたその普通った峰であるということを知れば、だれでも気が遠くなるような一種の疲れを感じずにはいられないであらう。

こゝまで登り来たった島々谷の溪谷を越えて、更に奥深くかなたへとはいることは、更にいっそうの深林と、いっそう清い流れと、いっそう壮大な山容の今にも現われくることを予示して胸をとどろかせる。しかし、それゆえに今まで登ってきた島々谷の美を軽視してはならない。偉大なる潤葉樹と、変化に富む流れと、緑と紅の四時の推移とより見たこの谷の完全は、その比を容易に見いだすことができるだらうか。

峠の頂上に達すると、白雪をいたゞいた穂高の秀麗なる連峰が俄然として現われ、峠を少し梓川の方へ降りると、右に常念山脈が辛烈な色彩をもって描きだされる。こゝで見る穂高の氣高い姿は、たしかに今まで山というものに関していだいておつた觀念を打破するにじゅうぶんである。そしてこれから下りこむ溪谷は、いちめんの樹木におゝわれている中から、千古の雪をいたゞいた穂高の姿が八合めあたりから六合めまでの中腹を白雲におゝわれたまゝに抜け出て、三里の上高地平原は、整然たる木立の装いもつて溪谷を埋めている一方を、梓川の河原が穂高のすそに沿うて白くうねっている。二十町ばかり下つて上高地の平原へ降りきると、溪声があちらこちらに聞えて、林道はにれ・さわらもみ・からまつ・とがの林のたゞ寂しい間を分けて行くのである。

穂高の氣高い姿を河童橋の上から見上げると、岳川の溪流が梓川の流れに落ちこむあたりのからまつとしらかばとのえもいわれぬ色彩と、透きとおる梓川がその間を抜けてゆつたりと流れくるありさまとは、おそらくは上高地高原の最もながめてあかぬけしきである。ゆくては焼岳の二筋三筋の寂しい噴煙をながめながら、もみやしらかばや小梨の間に咲いている楊蘭の紫紅の花を右手に見て、はんの木ややなぎの間を分けること七、八町ばかりで温泉の建物が見われてくる。梓川の流れはこゝではひとさわゆるやかに、川向こうのみづ／＼しいやなぎの林が漸次に高まつて、ますしらかば・からまつとなり、次に、あづさ・とが・もみとなり、やがては秀麗なる霞沢岳となり、その左にやゝ低く峰頭三分しているのは、地図に六百山と表われたものに該当する。

はじめてこの溪谷を訪れたところから今日に至るまでの年月の経過が、この溪谷にもたらした変化はなんと大きいことだろう。世の人の嗜好がしだいに海から山に轉ずるにつれ、この溪谷を訪れる人々は年々ふえてきて、近ごろは河童橋詰の穂高を仰ぐ屈強な場所に、更に一軒の宿屋が建てられるに

たった。温泉の川向こうの柳の林が切り取られ、橋から温泉に来る途中の深林がまばらになった。そして自然自身にも、また、大なる激変があつて、最近の焼岳の爆発は熔岩を流して梓川をせき止めて、一夜に周囲二里ばかりの湖水を作り、焼岳のすそから安房峠へかけての無類の深林の大部を枯らしてしまつた。温泉宿の主人の話によると、この溪谷の動物の間にもいろいろの変化があるといふ。たとえば、今まで見られなかつたからすやすずめが、六里の山坂を越えてはいつて来、今までぜんぜんいなかったと信ぜられたねずみが、そろ／＼騒ぐようになったのがそれであるといふ。

私のこれまでの自然に対する態度はあくまで動的であつて、したがつて、この溪谷においての今までのそれもやはりそのとおりで、たえず動いてこちらから求めなければならなかつたのであるが、奇妙にも、こんどは流れる水や、川向こうの柳の林や、たゞよう雲のゆくえを見ることだけで、そこに無限の情趣をくまれるようなこゝちを味わうことができるようになった。そしてこの溪谷の朝夕の自然の変化は、息もつかあえぬほどに趣に富む色彩と活動の姿態とを呈してくれるものであることをはじめに経験した。おそらくは五千尺のこの溪谷ほどに、移ろいやすい自然のはやわざをあからさまにうるわしく呈示する所は世にまたとあるまい。

朝の上高地を味わわんとする人は、またこの溪谷に朝日のささぬ五時すぎごろの欄干によつて、まづ梓川のほとりに目を轉じなければならぬ。まず目に入るものは霞沢山である。秀麗なるその峰頭から、下つて針葉樹、それから潤葉樹へと波うつゆるやかなうねり、その末は梓川の対岸に、左右に連なるやなぎとはんの木としらかばとからまつとのゆつたりした林——この林と川面とにかけつて一面にかゝっている薄もやは、今やかすかに揺り動いている。このときに、右の方の焼岳のいちめんになにも

のかが作用しつゝあることが見られる。このときの焼岳はささぬ河童橋に立つて見たときの山容とつて異なつて、なんと雄偉に、なんと見上げるばかりに高く見えることだろう。見よ、その東の半面はばら色に輝いて、噴煙は今しも眠りからさめたかのように、静かな明け方の天に沖して、その梓川に向かえる斜面をおう枯れ木と熔岩の流れた惨憺たる痕跡とは、ます／＼その雄偉さをひきたてることにあずかつている。しばらくすると徳本峠方面から朝日が上つて、朝もやがとけるにつれ、上高地一帯の溪谷が、にわか銀のような明かるい光がたゞよつて、梓川の川面がびか／＼と光つてくる。しかし、河童橋から上の方徳本峠から六百山のふもとへかけての密林にとざされた約一里間の冷たい空気が、なお暖められずに残つて、氷のような冷たい水は、その間を山側に沿うて流れているのである。上高地温泉の附近は、この一里の冷たい平地と、焼岳のふもとの密林との間の、梓川をまんな中にさしはさんだ平地の一角を占めて、それがこの平原のいちばん暖かい明かるい所となつているのである。霧は残りなく消えて、山のすみ／＼からしわまでも残りなく現われている。見たすかぎりの溪谷は、緑にもえぎをおりませて、霞沢連峰の八合めから下をいちめんにおうている。

この溪谷を見わたすこゝちは、よく溪谷にありがちの、なんとなく頭を押さえつけるような狭苦しい感じを興えることもなく、さらばといつて、まとまりのつかない、個性の認められないこゝちを興えるでもない。どこを見ても、それは、ゆつたりして、雄大な、そして堂々たる威風をもって、どこかに鋭い性格を持っているのが認められる。四囲の山々がアルプス式の山相をもっているから、山頂の峰嶮たる姿そのまゝの風趣が、この溪谷をおううているだろうと期待する人は、おそらくは失望するだろう。奔流、岩をかむ奇景があらば、むしろこの溪谷の統一を破るものである。奇岩、淵にのぞん

で、大きなまづがこれに伏するようなつきなみの光景が、この溪谷から求めえらるべくもない。どこまでもこの溪谷を埋めずめる気分は、新鮮なる色彩のあくまで透明ならんとする動搖そのものである。こがね色のいろどりが、あたりの風物の心髄を貫ぬくうるわしさである。そして、かくのごとき和か興趣を抜け出て、この溪谷の障壁をなせる外囲の山々の、なんと雄渾なことだろう。

耳を澄ませば、溪谷のあかつきは静かで、たゞあたりの潺流の音が聞えるばかりである。人は毎朝めざめるときには、溪谷を雨の音と聞き誤って床を出る。そして覚によって引かれた氷のような水は、焼岳から穂高山に連なれる峰の密林のしたりの集合であるということを知れば、だれしもこれを口にするのをうれしいと思わないものはなからう。

しかし上高地の美は、雨によってことに發揮されるのである。雨の上高地は、真に今までの翠緑の溪谷をしてにわかにかがねのいろどりに変ぜしめる。雨の日、欄干にもたれて、霞沢山から梓川のやなぎの林へかけて、どういふふうにもこの谷の物象が移り変わりゆくかをつくづくながめよ。平地よりはいつそう一條の雨と雨とのけじめがめいりょうなこの溪谷の雨は、まず煙のような蒸氣を横になびかせる。梓川の緑の木立は、見るが間にもえぎ色がかってゆく。今まで気がつかなかった樹木の霞沢に続く緑のうねりは、霧の晴れ間晴れ間に特にうるわしく描きだれる。あたりのさわやかな風物は、いつそらのさわやかさを帯びてくる。このときあふれる温泉におどりこんで、窓から霞沢を見ながら、空想にふけ入るのもすこぶる興味がある。雨が夕暮れ近くなってやむ。雲が盛んに動いて、霞沢の峰頭がとき／＼雲間に開く。しかし見わたす溪谷の下の方が、まだいちめん薄いもやをもっていつぱいになっている。見るがうちに溪谷がぱつと明かるくなってくる。しかしそれは霧がはれたからではなく

夕日がかげに輝いているのである。このとき、この溪谷をみたとす色彩は、平地の朝夕のみ知っている人には、どうして想像がききよう。わき返る溪谷全部の卵黄色——これがこの溪谷のこのときのもやの色を表わすにきわめて不十分なる總括的なことばである。はじめてかくのごとき光景に接した人は、かならず上高地溪谷の変幻の異常なることを考え、天変地異のきたらんことを恐れる。あゝ自然の変化の鋭いこの溪谷よ。周囲二里近くの湖水を一夜に形成して、今もなお、わずか一里のあなたに威嚇しつゝある焼岳よ。

しかし上高地の急激な雷雨を経験した人は、その光景をさらに印象的な最も忘れることのできないものうちに教える。その起るやとつさである。たちまちにして霞沢の峰頭がもう／＼たる雲に巻かれて、殷々たる雷が溪谷を震駭する。火柱が向こうの林から霞沢の頂上にかけて立つ。無数の雨足がもう／＼たる雲間を貫ぬいて、いっせいに溪声か鳴りどよむ。しばらくしてだん／＼明かるさが増してくる。雲が切れ／＼になって、もう日が輝いてくる。すっかり晴れあがった後までも、二ひら三ひらの雲が、やなぎの林に遅れさ迷うて、さながら帰り道を忘れてます／＼迷えるかのように、そして迷いながらもおあわてふためくことのできない生まれつきのように、林の上にゆる／＼して、ついにはそれもいずれへか去ってしまう。そして晴れあがった後のもえぎの色は、今にもベースを形作る樂の音となって、とけだしそらに揺れている。

同じながめも、見れば見るほど、そこには無限の趣がある。晴れたる日中の欄干にもたれて、霞沢山の峰頭から緑の木立のうねりの低下するにつれて、梓川まで見おろすとき、同じく緑と見えるうちにもさらに細かいいろどりのあるのをつくづく見ながら、なお一日の短いことを覚える。しばらく

すると、はるか東の方から白い雲がしきりに立ち上がるを見るであろう。その方面は越えてきた方向にあたるので、これを徳本峠とってはならない。峠を下ってくる林道は、梓川に沿うて約一里も深くうねってこの溪谷を下ってきたのであるから、それは峠のはるかに左にあたる蝶が岳で、あの黒ずんだ濃い緑の上を細く赤く頂を限っているのは、そのしるしなのである。かくて蒸し返るように暑い松本平からは、雲がしきりとわいているのに、山を隔ててこちらの溪谷では、人は、日なたぼっこをしながらそれを見ている。夕べになると、おきまりに安房山の上に團々たるこがね色の雲が現われてきて、六百山の三峰頭がばら色に変わってゆく。そして焼岳の噴煙はいつも寂しくたなびいている。

月夜の上高地、特に夕立後のそれは、最も印象深いものである。月のまだ上らぬ前は、まず霞沢一帯の峰は明かるみをおびてくる。しばらくすると、白い太い光が白銀の矢のように、斜に峰を越えて対岸の穂高の連峰へ注がれる。それからしばらくすると、月が少しく山の端に現われてくる。あれあれと思っているうちに、その姿が全部山を離れてしまう。そしてその月は、私らが平地の八月にながめ慣れているそれとはまったく異なっており、まさしくそれは平地の十月そのまゝの月である。月の姿が霞沢の左の六百山にかゝるとともに、冷たい霧は川向こうの林や川面に立ちこめてくる。このときの霞沢一帯の山と、梓川のほとりのうるわしさとは、いかなることばをもってしても、これを表わすにじゅうぶんでない。そして月自身はこよいはなんと近く見えることだろう。かく月の夜中のものでござよ。両戸を引かないへやの障子に、さながら十月のような澄みきった月の光がさして、たゞ隣室のいびきの音と、流れる瀬の音とが中夜のまくらに落ちる。このとき、人は自分というもののさゝやさは、今まで気づかなかった姿をもって表われてくることを感ずる。

この溪谷の二十日ばかりの滞在は、私をしてたえざる光景の変化と、それを受ける最も沈静な自らとを経験せしめた。そして二十日間は夢のように過ぎてしまった。しかしこの二十日間はついに私をしてたえずさえてきた書物を読むことも、筆を執ることもできないようにし、たゞ恍惚たる観察者となるに止まらしめた。

最後の日の朝六時前に私は宿を出立して、徳本峠めがけて帰路に着いた。温泉で知己になった信州麻績の丸山君が、私を河童橋まで送ってくれる。穂高の西方面は霧におゝわれて、河童橋のてまえのしらかばやからまつには、朝霧がいちめんたちこめていいる。しかし東穂高から奥穂高へかけての山容は、けさはいやというほどさえて、岳川の溪谷が見上げるように氣高く、そのふもとのしらかば・やなぎ・からまつが霧に浮いている間を、梓川の清流はものすごいほど黒く青くうねって流れてゆくのである。顧みれば焼岳の噴煙兩條として、東のいちめんは今や太陽の光を受けてばら色にいらしている。河童橋の最後の二、三分はなんとという印象深い、そして今までの感じを一まとめにしたいと思ふ欲念が忙がしくはたらいいた瞬間であったろう。丸山君は橋向こうに立っている。

上高地の二十日間の滞在は、私に何を興えたりするか。それは徹頭徹尾切実な、疲労を知らない緊張的な歓喜の世界に彷徨する感じそのものであった。つまりこの二十日は最も強い音楽に魅せられた瞬間の引きのばされたものであったといつてよいくらい、私にとって緊迫した情緒に満ちていたのである。

〔日本アルプスと秩父巡礼〕による

研究の手引

一、作者の自然に対する態度をこの文章より読みとる。

二、作者の次の敘述を本文について話しあう。

- (イ) 潤いに満ちた島々谷。
 - (ロ) 今まで山というものに関していただいておった観念を打破するにじゅうぶんである。
 - (ハ) 私のこれまでの自然に対する態度はあくまで動的であった。
- 三、「朝」・「雨」・「雷雨」の上高地の描写を比較し、それ／＼のすぐれている点を書きぬく。
- 四、自然を描写した文章を作る。

七 文 化

安 倍 能 成

安倍能成は、明治十六年（一八八三）愛媛縣で生まれた。哲学者。著書には「カント実践哲学」・「スピノザ倫理学」・「西洋近世哲学史」などがある。

文化というものは人間生活の最も根本的・本質的なものであるといえられると思うが、そういう根本的・本質的なものは同時に、ひじょうに人間生活に全面的に関連しまた滲透しているものである。本質的であると同時にひじょうに複雑なものである。そういうものを定義することはなかなか困難である。それで私のいうこともけっきょく單なる常識にとどまることになりはしないかと考える。いったいすべての事やものを考えるときには、対立するものと比較してみるとわかりがいい。たとえば、男とはどういうものかを考えるとき、その男に対する女をとってきて、女との相違を比較対照してみると、男というものがよくわかるのではないかと思う。

そこで文化に対立するものは何かといえは、すなわち自然である。したがって自然と文化とを比べて話せば、おのずから文化というものの性質がわかってくると思う。「自然」という漢字は、訓ずれば「おのずからしかり」となる。だれがそうするということなしに、ひとりでいろいろな現象が起つてきている。それを自然といっている。

そういう自然に対して、人間の文化というものが人間の意識を働かし、意志を働かしてできたところのものであることはあらそわれない。

「自然」ということはラテン語では、ナトゥラ (natura) といつており、ドイツ語のナトゥール (natur) フランス語のナチュール (nature)、英語のネーチャア (nature) とはみなこれから出たことばで、「生まれたるもの」という意味を持っている。生まれたというのは、何かしら人が人間ならぬ力によって生まれた、すなわち人力を加えることなく、それ以上の、また、それ以外のものによつてひとりで生まれたという意味を持っている。であるから、人間からいえば、自然はすなわち與えられたものである。人間が造つたものではなくして、人間が意志を働かし作爲を加えるということなしに人間の前にあるもの、それが自然である。こういうふうと考えていい。それゆゑ自然に対して文化が人為であるということはあらそわれない。その証拠に人間のないところに文化は生じないからである。

まずそれを簡単な例で言ってみよう。ごく野蠻の時代にも人間は水を飲むという必要は感じたが、そのために特に設備をするということはなかった。そこらあたりの谷川からゆきあたりばったりに水を飲んでいた。よし雨が降つて水が濁つても、おそらくその時代の人間は、平氣でそういう水を飲んで腹を痛めなかつただろう。濁つた水を飲むのがいやなら、三日や四日水を飲まぬくらいのもので

きたかもしれない。それで水を飲むという要求も特別に人間の意志や意識を働かすことなく満たされておった。しかし人間がだん／＼発達してくると、濁った水を飲むのはいやだというふうになる。雨の降ったときには濁った水しか飲めない。あるいは日照りが続くと水を飲むにも水がない。そうなる。とたゞゆきあたりばったりでは、水を飲むという人間の自然的要求を満たすわけにはいかない。そこで始めて人間は水を飲む必要があるということを意識するようになり、その意識によって、水を飲みたいという意志が自覚的に起ってきて、その意志を満たすための手段をいろいろ考えることになる。初めは石でせいた水たまりのようなものを造って、日照りがあっても水が枯れにくい簡単な設備をするかもしれない。しかもそれがす／＼んで井戸を掘るといふことになれば、雨が降っても濁らない、日照りが続いてもなか／＼枯れない。かくして自然が與えてくれた條件、その條件にかゝらずその條件を征服して、人間が水を飲むという要求を満たすことができる。これはごく簡単ではあるが、人爲というこののできる原型であって、既に文化的活動の始まりがそこにあるといつていい。ところが井戸を掘っても水が出ない土地があり、水が出てその水がよくない所がある。「永遠の都」とよばれる世界的都市ローマは水がよくない所らしいし、水の便の悪い所である。ローマの都へ行ってみると今でもところどころ町の四つ辻よじの所などに泉があつて、引かれてきた水が流れ出ている。二千余年前のローマに既に水道があつて、その雄大な規模は今なお残っている。ローマではいい水が飲めない、あるいは水の便が乏しい。これが自然の状態、人間に與えられた状態である。この與えられた状態をどうしようという意力も知力もなかったなら、水を飲まないでいなければならぬ。すなわちローマの七丘の上にあゝいう大きな都市を築くことはできなかつたであらう。それをよそからきれいな水を

引いてきて、この自然の與えた條件を打破することになれば、そこに人間の文化的意志といふか意欲といふかは、力強くまた大規模に組織的に実現されてくる。たゞ個人個人が水を飲むばかりでなく都民全体が飲む、全体が飲むためにはある水源地から水を引いてきて、それを系統的に分けねばならぬ。かくてローマに昔から水道が開けていたことは、ローマ人に文化、しかも強大な文化があつたといふ一つの証拠である。

そういうふうにして人間の欲望は発達してきて、自然の與えてくれた條件に満足せず、それを克服して人間の注文どおりにしていこうとする。それが更に複雑になってくると、たとえば夜中にのどがかわいたとき、井戸ばたに行つてつるべくんで飲むというのはおっくうである。寒夜などはことにそうである。そこでへやにいたまゝで寒いめをしないで水を飲みたいという注文が出てくると、水道の管をへやの中へ引いて、ちよつとねじを回して、いながらにして水を飲むことになる。こういうふうにだん／＼と與えられた状態から遠ざかるような、あるいは與えられた状態を变化するような設備が、人間的意図の発達、または変化に應じて作られるといふことになる。これが文化であつて、この水道などはまず人間の物的要求を満たすところの施設であるが、それを満たすために人間の精神的能力が要せられ、それを満たすことによつていろいろ／＼な精神的結果が生ずることはいふまでもない。

文化は人爲であり、ひろい意味での文化はいっさいの人爲を包括するが、しかし、われ／＼がよつう文化といつているのは、人爲の中でも最も本質的なあるいは恒久的なものをいっているのである。人爲といつても種々雑多であつて、その場その場の要求を満たすものも人爲に相違ない。しかしこういう一時的もしくは偶然的な要求およびその満足は、人爲であつても、人爲という意味はしぜん依存的

本能的な要素が多い。文化の中にはふつう常識的に宗教・道徳・学問あるいは藝術・学藝などが数えられている。それはこれが文化の本質的な恒久的な要素をなすものと考えられているからである。それは、これらのものが人間の最も深い個人的な要求に根ざすとともに、普遍的な人間の要求に通ずるものであり、時代により民族によって変遷と相違とはありながら、更にそれを超越するところのものを含んでいるということ、それが單に自然に依存し、自然のまゝに浮動するものでなくて、根強く人間のものになっていくことを意味している。こういうものは人爲の中に最も深く個人に根ざすとともに、最も多く社会的意義を有し、民族と時代によって特殊性を發揮するとともにあまねく人類に通ずるものである。これは宗教の有する個性・人格性とその社会性とを考えても、また道徳が個人の良心を離れては意義を失うとともに、社会的関係・社会秩序の結紐ちゆうぶであることを考えても理解されるであろう。

ひろい意味からいえば、政治や経済の現象も人間の文化活動であるが、それはせまい意味では文化といわれていない。それは政治とか経済とかが、人間の比較的一時的の要求を満たすことが多いといふところからくるものであろう。もちろん、人間生活が嚴密にいろ／＼な部分に分けられるものではないといふことは考えねばならず、文化的要素が、政治や経済などの部分にないといふことは決してなく、いわゆる宗教や藝術が、純粹に文化的だといふわけでもないことはもちろんである。

そういうふうに、文化は人間が自然に依存したまゝでは、いつまでたっても生じるものではない。鳥や獸には文化はない。しかし、みつばちなどが、一種の社会組織みたいな團體生活を作つて、人間を感心させるようなことがあるが、しかし、それは自然から興えられた本能以上に出てはいない。し

エマーソン
Ralph Wal-
do Emerson
son
(1803-1882)
アメリカの
思想家。作
家。コンコ
ードに住ん
でいた。

たがって、そういう生活は反復だけであつて、發展がない。そういうものは文化とはいえない。文化には意欲が加わる。いろ／＼な環境に従つていろ／＼な要求を出し、したがつてまた新たな環境を作りだすのである。アメリカでは、今でもエマーソンがよく読まれているそうだが、コンコード賢人とされたこのエマーソンは、われ／＼人間の生活は單なる反復 (Repetition) ではうけなす。發展 (development) でなければならぬという意味のことを言つてゐる。これはけつぎよく人間の生活が、すなわち文化的な生活なることを意味するものである。かくして人間が、ある程度自然から離れるとか自然以上に出るといふことでなければ、文化は生じないといふことは肯定されてよい。

ところが、人間が全然自然から離れきつた場合、はたして文化は生じたかといふと、これに対しては否定的な答を與えるほかはない。人爲の人爲とはいふが、人爲の根底に自然がある。人間は自然から興えられたものを基盤として、はじめて文化的活動を営むことができるのである。そのうえ人間そのものがやはり自然である。人間が人間を生むといふが、実は生まれたといつてもよいのである。また人間の活動の中には、意志を用いずに自然に與えられるものはないかぎり、人間の文化的活動・意識的活動は起りようはない。すなわちわれ／＼の中にある自然なしには、あるいはわれ／＼が自然であることなしには、われ／＼の文化的活動は一步も動かない。同時にわれ／＼が自然から材料を仰ぐことなしには、文化的活動も文化的生産も遂げることはできない。自然が材料を供給してくれなければ、人間の文化的な営みは何一つできない。そういう意味でも文化は自然に依存している。それから人爲はある程度まで自然を征服することができる。自然の状態を変換することができる。たとえばりっぱな堅固な建築の一室に適當な保温の設備をする。そこを美々しく裝飾し、山海の珍味を食ひ、芳醇じゆんな美

文藝復興時代

Renaissance
noe
十四世紀の
中ごろから
十六世紀の
終りまでイ
タリアより
全ヨーロッパ
に起つた
文化活動の
時期。
フランシス
ベーコン
Francis
Bacon
（一六一一—一
六二〇）
イギリスの
哲学者。経
験主義哲学
の祖といわ
れている。

酒を飲み、よい音楽を聞く。そこでそのへやがまったく周囲の自然と離れた一つの別世界になってく
る。戸外では風が吹きすさみ、寒さはきびしいのに、へやの中はまるで春のようである。自然なんか
どこにあるという心持になりがちだが、この思いあがった人間世界の中で、自然の活動がなくなった
かといえなければならぬ。自然の状況が変わっているにすぎない。人間の注文でいろ／＼歪曲さ
れたのを不自然といっているが、これも一種の自然である。寒風の吹きすさめる戸外の世界にも、春
のように暖かな室内にも、自然の法則の働いていることに変わりはない。その働く条件が変えられて
いるにすぎない。太陽の光線はまっすぐにさすものだが、壁に当たれば屈折する。そういうふうに自
然の法則はひじょうに柔軟性をもっていて千変万化する。それを人間は認識しないで、自然を征服し
たなどとうぬぼれているが、自然の法則は、人間がいかにあがいたところがそれを抹殺するわけには
ゆかない。だから人間の文化は、自然の法則を抑圧したり無視したりすることはできず、それを違っ
た条件のもとに働かせる以上には出ない。文藝復興時代にフランシス・ベーコンが、「自然を征服す
るためには自然に従順でなければならぬ。」という意味のことを言っているが、これは自然を人間の
用に供するためには、自然の法則を知ってこれを守らねばならぬということである。だから一面から
いえば、人間のやる文化的営みというものも、自然に比べてははかないものだといえる。「國滅びて
山河あり。」ということはそれを語っているといつてよからう。しかし人間の文化の自然に及ぼした変
化の大を思い、また人間ののこした文化の今なお新たであることを考えるとき、人間の力の大きなこ
とをも認めずにはおられぬ。衰亡のギリシアをとらう旅客も、ギリシアの自然を見るためでなく、廢
墟の中に滅びぬ昔の文化のおもかげに感激せんためである。人間にとってはやはり文化あつての自然
であろう。けっきょく自然のまゝでは文化は生まれぬ。しかし自然なしには文化は生まれぬ。こ
の二つの矛盾的關係の間に文化が生ずるというわけである。

（雑誌「改造」による）

研究の手引

- 一、次のことを読みとる。
 - (イ) 自然と文化との關係
 - (ロ) 文化の本質
- 二、作者の定義した文化の意義を簡條書にまとめてみる。
- 三、作者が文化の説明のためにあげた「水を飲む」の例にならって、他の例をあげ、話しあう。
- 四、エマーソン・ベーコンについて調べる。
- 五、「自然と人」という題で作文をする。

古 典

われ／＼は時代を越えて、生き続けていくすぐれた古典のいくつかを持っている。読むたびごとに現代の
われ／＼の心に触れ、われ／＼の心を豊かにしてくれるものこそ古典とよばれるものであろう。芭蕉の「奥
の細道」もわれ／＼の古典の一つである。

「奥の細道」は芭蕉四十六歳のときの紀行文である。元禄二年（一六八九）門人曾良とともに江戸より奥
羽・北陸を経て、美濃大垣に至った七箇月の旅であり、芭蕉の一生を通じての大きい旅であった。この課で
は「奥の細道」とともに、年少のころより芭蕉に親しんだ文学者島崎藤村の文章をあわせ読んで、古典の持
つ意義を明らかにしていこう。

清輔
(1105-1178)
藤原氏、歌人。

白河の関にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へとたより求めしものことわりなり。中にもこの関は三関の一にして、風騒の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、もみぢを面影にして、青葉のこずゑなほあはれなり。うの花の白妙に、いばらの花の咲き添ひて、雪にも越ゆることちぞする。古人冠を正し、衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめおかれしとぞ。

うの花をかざしに関の晴れ着かな

曾 良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄・常陸下野の地をさかひて、山連なる影沼といふ所を行くに、けふは空曇りてもの影映らず。須賀川の駅に等窮といふ者を尋ねて、四、五日とどめらる。

宮 城 野

名取川を渡りて仙台に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて四、五日逗留す。こゝに画工加右衛門といふ者あり。いさゝか心ある者と聞きて、知る人になる。この者、年ごろさだかならぬ名どころを考へおきはればとて、一日案内す。宮城野のはぎ茂りあひて、秋の氣色思ひやらるる。玉田・横野・つゝじが岡はあせび咲くころなり。日影も漏らぬまつしの林に入りて、こゝを木の下といふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂、天神の御社など拜みて、その日は暮れぬ。なほ松島・塩釜の所々絵に書きて送る。かつ、紺の染緒つけたるわらじ二足はなむけす。さればこそ風流のしれもの、こゝにいたりてその実を顯はす。

あやめ草足に結ばんわらじの緒

かの絵図に任せてたどり行けば、奥の細道の山際に、十府の菅あり。今も年々十府の菅菰をとゝへて、國守に献ずと言へり。

松 島

ももくことぶりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたふふ。島々の数を盡くして、そぼだつものは天を指さし、伏すものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分かれ、右に連なる。負へるあり、いだけるあり。兒孫愛するがごとし。まつの緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その氣色眷然として、美人の顔をよそほふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を振るひ、ことばを盡くさん。

雄島が磯は、地続きて海にいでたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、まつの木陰に世をいとふ人もまれく見えはべりて、落ち穂、まつかさなどうちけぶりたる草のいほり靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立ち寄るほどに、月海に映りて、晝のながめまた改む。江上に帰りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝すること、怪しきまで妙なるこゝちはせらるれ。

松島やつるに身を借れ候とときす

曾 良

平 泉

こがね花咲く
万葉集にある歌。

十二日、平泉と志し、あねはのまつ、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに、雉兎・葛藟の行きかふ道、そこともわかず、つひに道ふみたがへて、石の巻といふ港にいづ。こがね花咲くとよみて奉りたる金華山、海上に見わたし、数百の回船入り江につどひ、人家地を争ひて、かまどの煙立ち続けたり。思ひがけずかゝる所にも來たれるかなと、宿借らんとすれど、更に貸す人なし。やうやくまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の萱原などよそ目に見て、はるかなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。その間二十余里ほどと覚ゆ。

秀衡
(生年未詳
一〇七〇
奥州の豪族藤原氏。
泰衡
(二聖一八九
秀衡の子。
國破れて
杜雨の詩句
にある。

三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は衣が関を隔てて、南部口をさし堅め、えぞを防ぐとみえたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時のくさむらとなる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと、かさうち敷きて、時の移るまで涙を落しはべりぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡
うの花に兼房見ゆる白毛かな

曾 良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七宝散りうせて、珠のとびら風に破れ、金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛のくさむらとなるべきを、四面新たに囲みて、藁をおほうて風雨をしのぐ。しばし千歳のかたみとはなれり。

さみだれの降り残してや光堂

尿 前 の 関

南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊まる。小黑崎・美津の小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の関にかゝりて、出羽の國に越えんとす。この道、旅人まれなる所なれば、関守に怪しめられて、やうやくとして関を越す。大山を登りて、日既に暮れければ、封人の家を見かけて宿りを求む。三日風雨荒れて、よしなき山中に逗留す。

のみしらみ馬の尿するまくらもと

立 石 寺

立石寺
山形市の東
北山寺村に
ある天台宗
の寺。

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、ことに清閑の地なり。一見すべきよし人の勧むるによりて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借りおきて、山上の堂に登る。岩にいはほを重ねて山とし松柏年ふり、土石老いて、こけなめらかに、岩上の院々とびらを閉ぢてものの音聞えず。岸をめぐり、岩をはうて佛閣を拜し、佳景寂寞として心澄みゆくのみ覚ゆ。

しづかさや岩にしみ入るせみの声

象 瀉

江山水陸の風光、数を盡くして、今象瀉に方寸を責む。酒田の港より東北の方、山を越え、いそを

能因法師

没年不詳。
平安時代の
歌人。

花の上こぐ

「きさがた
の櫻は波に
うづもれて
花の上こぐ
あまのつり
舟」

西行法師

(二二八―二九

〇
歌人。

傳ひ、いさごを踏みて、その際十里、日影や傾くころ、潮風まさごを吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、海人のとま屋にひざを入れて、雨の晴るるを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさしいづるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟をあげれば、花の上こぐと詠まれしさくらの老い木、西行法師のかたみを残す。寺を干満珠寺といふ。

この寺の方丈に坐してすだれを巻けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天をさへ、その影映りて江にあり。西はむやむやの関路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道はるかに、海北に構へて波うち入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は恨むがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を悩ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越しやつる脛ぬれて海涼し

出 雲 崎

酒田のなごり、日を重ねて、北陸道の雲に望む。はるくの思ひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の関を越ゆれば、越後の地に歩みを改めて、越中の國一ぶりの関に至る。この間九日、暑湿の勞に神を悩まし、病おこりてことをしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天のがは

金 沢

うの花山、くりからが谷を越えて、金沢は七月中の五日なり。こゝに大坂より通ふ商人何処といふ者あり、それが旅宿をともにす。

一笑といふ者は、この道にすける名のほのく聞えて、世に知る人もはべりしに、去年の冬早世したりとて、その兄追善を催すに、

塚も動けわが泣く声は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手ごとにむげや瓜なすび

途 中 吟

あかくと日はつれなくも秋の風

全 昌 寺

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、まづたちて行くに、
行きくつてたふれ伏すともはぎの原
と書き置きたり。行く者の悲しび、残る者の恨み、双鼻の分かれて雲に迷ふがごとし。予もまた
けふよりや書きつけ消さんかさの露

た夕べを思うべし。」というような心持から生まれてきているからだとは思いますが、まだその他に自分の心をひく原因がある。近ごろ私は、少年期から青年期へ移るころにかけて受けた感動が、深い影響を人の一生に及ぼすということによく思いあたる。ちょうどそうした心の柔らかい、感じやすい年ごろに、私は芭蕉の書いたものを愛読した。そのときに受けた感化がいまだに私に続いている。どうかすると私は、少年時代に芭蕉を愛読したと少しも変わりのないような、それほど固定した印象を今日の自分に見つけることもある。

かつて私は近江から大和路の方へかけて旅したことがある。私はまだごく若い盛りの年ごろであった。私は熱田から船で四日市へ渡り、龜山というところに一晚泊まって、伊賀と近江の國境を歩いて越した。あれから琵琶湖のほとりへ出て、大津・瀬田・膳所などの町々を通って西京から奈良へと通り、吉野路を旅した。私はもう一度琵琶湖のほとりへ引き返して、石山の茶丈の一室に旅の足を休め、そこに一夏をおくったこともあった。私は自分の郷里の木曾路の変遷を考えてみても、何ほど、若いときの自分の目に映った寂しい伊賀の山中や、吉野路の日あたりや、それから琵琶湖のほとりが、その昔蕉門の詩人らの歩いた場所と違った感じのものであるやをいうことはできない。しかしあの旅も私にとっては芭蕉に対する感銘を深くさせた。

少年時代から私の胸に描いていた芭蕉は、一口に言えば、尊い「老年」であった。私はつい近ごろまで芭蕉という人のことを想像するたびに、ひじょうに年をとった人のように思っていた。この晩年は、人として到達しうる最後の尊い境地の一つだというふうに考えていた。こゝにも先入主となった印象がいまだに私のうえに働いていることを感ずる。私がああ湖十の編纂

近江 滋賀縣の古
大和 奈良縣一帯
伊賀 三重縣の古
稱。

白金 東京都港
区。



した芭蕉の「一葉集」を手にしたのは、まだ白金の明治学院に通っていたほどの学生時代であった。私が年少であればあるだけ、あの老成な紀行文などを書いた芭蕉がひじょうに年とった人であるという想像をうかべずにはいられなかった。けれどもこれは自分が若かった年ごろに芭蕉を知ったというばかりではなく、こうした先入主となった印象を強めるかす／＼のものが、他にもあったと思う。じっさい三十一歳で既に髪を薙いでしまつて、自ら風羅坊と称したほどの人から、貧士竹斎に似ていると言つて自ら狂句まで作ったほどの人から、たいていのものを受ける感じはあの笠翁という人の描いた芭蕉の肖像に見るような、隠者らしい着物に頭巾をかむった年寄りくさい人物であらねばならない。「翁」ということばの持つ意味がいちばんよくあてはめられるのも芭蕉であるような気がする。

芭蕉は五十一歳で死んだ。それについて近ごろ私の心を驚かしたことがある。友人の馬場孤蝶君はその昔白金の学窓をいっしょに卒業したなかまであるが、私よりは三つほど年かさにあたる同君が、來年はもう五十一歳だ。馬場君のことを孤蝶翁とよんでみたところで、だれも承知するものはあるまいと思われるほどに同君はまだ若々しいが、來年の馬場君の年に芭蕉は死んでいる。

これには私は驚かされた。老人だ、老人だ、と少年時代から思っていた芭蕉に対する自分の考え方を変えなければならなくなってきた。思ひのほか、芭蕉という人は若くて死んだのだと考えるようになってきた。なるほど元祿の昔と今日とは、社会の空氣からして違ふだろう。あの元祿時代の

馬場孤蝶 本名勝彌
(一八七一—一八四〇)
詩人。文藝
評論家。

芭蕉翁に、自分の友だちなかまでも格別氣象の若々しい馬場君を比較することは、ちとむりかもしれない。それにしても私は芭蕉という人が、大阪の花屋の座敷でこの世を去ったというときでも、実際においてそれほど老年ではなかったということを考える。ついでこのごろも馬場君が見えたときに、私はこのことを同君に話して、それからあの芭蕉の藝術の底にこもる香氣の高い情熱について語りあったこともあった。

「四十ぐらゐのときに、芭蕉はもう翁という氣分でいたんだね。」

と馬場君も言っていた。もっとあの人が長く生きていたら、どんな詩の境地がひらけていったらう、というような話も私たちの間に出た。

とにか、私の心の驚きは、今日まで自分の胸に描いてきた芭蕉の心像を、十年も二十年も若くした。そう思つてもう一度芭蕉の全集をあけてみると、「冬の日」のできたのは芭蕉が四十歳になったばかりのころだとあるし、「曠野」のできたのが四十五歳のころだとある。「猿蓑」の選ばれたころですら、芭蕉は四十八、九歳の人だ。芭蕉の藝術はそれほど年老いた人の手に成ったものではなくて、実は中年の人から生まれてきたおさえにおさえた藝術であるといわねばならない。

まづたく思いがけなかったのは、私がバリにいるころ、ヴェルレーヌに芭蕉を比較した一節をカミーユ・モークレルの著述の中に見つけたことであつた。それを見つけたときに、一部のフランス人の中には、芭蕉の名が傳えられていることを知つた。もっともあのカミーユ・モークレルというよな人が、どうして芭蕉を知つたかといふことは、ちよつと私には想像がつかない。

ヴェルレーヌ
Paul Verlaine
(1865-1896)
フランスの詩人。
カミーユ・モークレル
Carnie
Mouclair
(1871-)
フランスの文藝批評家。

笈の小文

元祿元年芭蕉四十五歳のときの吉野の紀行文。
去來
〔元祿一七四〇〕
芭蕉の門人嵯峨日記
元祿四年大阪京都を旅した紀行文。
凡兆
〔生没年不詳〕
芭蕉の門人。
杜國
〔生年不詳一六六六〕
芭蕉の門人。

「笈の小文」・「奥の細道」などの旅行記が、何度くり返して読んでも飽きないことはいまさらこゝにいうまでもないが、芭蕉が去來の落柿舎で書いたという「嵯峨日記」に私は特別の興味を覚える。芭蕉の日常生活の消息が、その簡潔な日記の中によくうかゞわれるような氣がする。

あの中に、「ひとり住むほどおもしろきはなし」などと言いなから、羽紅夫婦を泊めて五人で一張の蚊帳に寝るほど人なつこい芭蕉がいる。一つの蚊帳に五人では眠られなくて、皆夜半過ぎから起きて、菓子を食べながら曉近くまで話したということなどが書いてある。その前の年に芭蕉が凡兆の家で泊まったときは、二疊の蚊帳に四箇國の人が寝て、思うことが四つで、夢もまた四いろを書いたと言いだして、皆を笑わせたということなども出てくる。それからまたあの日記の中には、百日ほど行脚をともしした杜國の死を夢に言いだして、すゝり泣きして目がさめたというほど多感な芭蕉の性質も、表われている。

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

こういう句となつて形をとるまでには、芭蕉の情熱は何ほどおさえにおさえたものであるやもしれぬ。

こう思うと、私は今まであまり芭蕉という人を年寄り扱いにしすぎていたような氣がする。あまりに仙人扱いにしすぎていたような氣もする。もっと血の氣の通つた人を見つければならない。そこからあの抑制した藝術を味わひ直してみねばならない。

この考え方からいくと、私は芭蕉翁桃青とうせいという人の肖像をそんな枯淡なものでなくて、もっと別のものに描かれたのを見たい。たゞ道服に似たようなものを着け、隠者のような頭巾をかむっていても、その人のほおは若々しく、その人の目には青年のような輝きのある肖像として見たい。

「あらものぐさやの翁や。日ごろは人の問ひくるもうるさく、人にもまみえし、人をも招かじと、あまたたび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ友のしたはるるもわりなしや。ものをも言はずひとり酒飲み、心に問ひ心に語る。いほりの戸押しあけて雪をながめ、または盃はとりて筆を染め筆を捨つ。あらものくるほしの翁や。」

酒のめばいと寝られぬ夜の雪

と芭蕉は自白している。

芭蕉の生涯は旅人の生涯であつたばかりでなく、漂泊者の生涯であつた。「漂泊の思ひやまず」と道の記の中に力強く書いてあつたと思ふ。芭蕉に行こうとする者は、あのことばの光を捕らえることを忘れてはなるまい。

やがて死ぬ氣色は見えずせみの声

この句は漂泊者の精神の光景を指摘してみせたようで、なんとなく胸に迫る。

芭蕉は精神上の旅人でもあつた。西行へも旅し、定家さだいえへも旅し、万葉の諸歌人へも旅し、李白へも旅し、杜子美へも旅し、寒山へも旅した。漂泊に徹したこの詩人は、一步は一步より動搖のうえに静

坐する精神的の生活を創造していったようにみえる。

定家
(CHOKIEN)
藤原氏。歌人。

李白

(七二七)
中國の詩人。

杜子美

(七二七)
中國の詩人。

寒山

拾得ととも
に中國唐代
の名僧とい
われる。

勝峰氏

勝峰晋風

(八六)
俳人。

漂泊は芭蕉の心を生かした。それと同時に、芭蕉の肉身をいためたものもまたその漂泊の生涯ではなかつたらうか。勝峰氏の芭蕉俳句定本によると、奥の細道の旅には百六十日を費やし、その里程は六百里に上ると傳えてある。

旅癖や寝冷えわづらふ秋の山

幻住庵での句とあるが、この旅癖の重なり重なつたものが、やがて大阪の道修町で病臥びやうするようになっていったその下地ではなかつたらうかと思ふ。

芭蕉は日常生活の細目に精通した詩人であつた。

海人の家は小えびにまじるいとどかな

芭蕉の句の細みというのも、こうした細目に詳しいところから養われてきているかにみえる。さすがに芭蕉はとらわれていなかった。あくまで日常の生活に立脚して、そこからつばな創作をつかみ出した。どうかすると象徴的な境地にまで句作をおしすゝめていった。それも理のあることだと思ふ。なぜかなら、芭蕉は細かに日常の生活を味わつたばかりでなく、幻想をいだいた詩人であつたらう。

あやめ草足に結ばんわらじの緒

よく見ればなづな花さくかさねかな

伏見

京都市南部
の一区。

董其昌

(一五五—一六六)

中國明代の
画家。

わがきぬに伏見のもゝのしづくせよ

芭蕉の感情の優しさが私たちの心をとらえる。その感情の優しさは処女の持つもののそれに比べた
いとさえ思われるほどである。私は董其昌の描いた草木の優しさをもってきて、よくそれを芭蕉の句
に比べてみることもある。

ぼたん蕊ふかく分け出る蜂のなごりかな

白げしにはねもぐ蝶のかたみかな

芭蕉の詩は、魂の詩であるとは言っても、これらの句を見てもわかるように、私たちの感覚にまで
迫ってくるもののあることを見のがせない。

私は藝術上の感銘を言い表わす場合に、人格ということばを避けたい。人格ということばは批評の
ゆさどまりのような気がしてならない。藝術は要するに人格だとおまかに言ってしまうと、それ以
上、どうにも動きがとれないかと思う。これは芭蕉のことを言ってみる場合にもあてはまる。

私は病床にあったころ、試みに芭蕉の句集の中から自分の最も好きな十句ばかり選んでみようとし
た。まくらの上で見てくると、あれも捨てられない、これも捨てられないと思う句が目について、ど
うにもその心を定めかねた。せめて百句ばかりを選んでみるとしたら、と思ったこともあった。

なんととっても、芭蕉の旅情を直接に詠じたものには詩人としての特色が最もよく表われている。
道の記にはさんである旅の句はみな好ましいものばかりだ。

あか／＼と日はつれなくも秋の風

芭蕉のいう「鐙元に切りこむ」とはこれだ。その切実な感じは直ちに私たちに迫ってくる。

馬をさへながむる雪のあしたかな

旅人が旅人をながめた心持は、この句などによく表われていると思う。

(「日本文学講座」第五巻による)

研究の手引

- 一、藤村の文章中にある芭蕉の俳句について、めい／＼の解釈を発表する。
- 二、芭蕉のどういう点に藤村は心をひかれているか、本文について調べてみる。
- 三、藤村がこの文章中に引用している芭蕉のことばや文章について調べる。
- 四、藤村の芭蕉作品の読み方につきめい／＼の読書の体験に照らしあわせて話しあう。

映画

映画はわれ／＼の教養を高めるうえに、大きい役割を果たしている。映画のことばは演劇のせりふとも
に、話しことばへの反省の手がかりとなり、映画そのものはわれ／＼の感覚を鋭くしてくれる。

この課では映画藝術論である「映画性の発見」と、シナリオ「トンネル」とを読み、現代の新しい藝術に
対する理解を深めていこう。

一〇 映画性の発見

津 村 秀 夫

津村秀夫は、明治四十年（一九〇七）兵庫縣で生まれた。映画評論家。東北大学卒業後、直ちに映画批評

の筆をとり、現在朝日新聞東京本社に勤務。著書に、「映画と批評」・「続映画と批評」・「映画と鑑賞」・「続映画と鑑賞」・「新しい映画美」などがある。

一

ことしは、春がようやくさす二月の末ごろより、まれには東京の町に特有のからっ風の吹く日ですら——私は日曜日というところ、やっと四歳になったばかりの自分の幼女の手を引いて銀座へ出た。買物もあれば、散歩の目的でもあるのだが、要するに私には都会の町が何よりも魅力なのである。日曜日の銀座裏も晝は静かである。そうして、その静かでのもしい気分が春の日の光を浴びながらかすかなほこりを立てている中に立つと、私はいつもよみがえったような新鮮味を感じた。夏の日ざかりも昔から私の愛着を覚えるものの一つだが——。私はとにかく日光の和らかい下でも、もしくは強烈な夏の直射の下であっても、ひとたび都会の裏町に立つと、季節の変化によりさまざまの感覚と情調にひたり、町の細部細部の観察に恍惚うろたとなるのが常であった。晝の銀座裏は日にさらされた樂屋裏である。人工の夜よりもはるかに美しい……。

しかし、私の幼女はいつのまに覚えたか、近來は漫画映画を愛するにいたったので、父が生きがいを感じる日曜日の散歩も、彼女のためにしばしば妨害されるようなことがあった。裏通りの小映画館の前に出ると、そら恐ろしいことには、彼女はたもとを握って放さず、あたりかまわず叫びだすのである。愚かなる父はこの幼女を肩に差し上げて満員の人かきの後からニュースや短編を幾度ながめたことであろうか。初夏ともなれば、父の額はとうとう汗によごれ、ものの二十分も軽からざる幼女をけんめいに両手でささえる努力は私をして、へとへとにさせたことが一再ならなかった。私はろくろくスクリーンなどは鑑賞できないのを常としたが、たゞ一度だけ珍しいものを発見したのである。

それはある幼稚園のあどけない子どもたちの遊戯を写していた短編映画なのだが、——全景画面からある男の子の近写画面となると、観衆はどっと笑いくずれたのである。なぜ観衆は笑ったか、そこにはなにも珍奇なものはなく、こっけいなるべき演技の何一つあったわけではない。その四、五歳の児童はさわめて平凡な表情をし、さわめてしぜんに立っていたのである。しかしたゞそれだけの画面に、人々はなぜ腹をかゝえたか——要するに、この子どものみはぼんやり者で、他の児童たちがいっせいに円陣を描いて、ある種の運動を続けていたのに、彼のみは立ち止まってぶざまな手つきで一つのまちがいをやったというだけのことである。そのまた、立ち止まってまちがえた瞬間をカメラは敏捷にもとらえて、それを他の児童たちのそろいの運動の全景画面の次へ持ってきたればこそ観衆は思わずふさだしたのである。ところで私は考えた。もし、われわれが幼稚園でこの光景を現実に目撃したのならば、われわれは、はたして腹をかゝえて笑ったかどうか。おそらく微笑したにとどまるのがせいふである。その程度の平凡な現実風景に過ぎないのではないかと……。

この映画の笑いには、たしかに前の画面との連関というものが、すなわちモンタージュというものが、重要な作用となって人々に働きかけたには違いない。のみならず、その子どもの表情がいかにもカメラの前でいぶかしげな、（それだけにすこぶるナチュラルな）こむずかしい顔で額に八の字を寄せていたがゆえにこそ、それが映画の観客にはすっとぼけさかげんのおかしさとなって作用し、この子どもの姿が一種の巧まざる喜劇的演技となったのであろう。が、しかし私の考えた重点はむしろ

他にあつたのである。それはこの平凡な実写画面を通じて考えた映画の「粹」というものの作用についてであつた。全体の中にあるこの子どもを現実に目撃したのではさほどおかしくないにもかゝらず、全体の中からの子どものみの姿を切り取った特殊な画面——すなわち、映画の「粹」の作用のゆえにこそおかし味が倍加されたという一点——子どもの表情の微妙なおもしろ味がはじめて観客に提供されたという一点にあつたのである。

クローズアップというものは、無声映画形式の時代より、つとにさまざまの映画美学者や映画研究家の筆によって論じられ、その魅力と特殊作用については、既に一介の映画ファンといえども熟知していることには違ひはなかつた。構図とかカメラ・アングルとかいうものについても同列である。今日、そのようなことはもはや平凡なる映画常識であるかもしれない。だがしかし、私はそのニュー・映画の一片を見てより、あらためて映画の「粹」の神秘について懷疑し始めたのである。それはもはやクローズアップや構図の問題ではなかつた。現実へ向かつて「粹」をいかなるふうにはめるかということ、換言すると現実世界（この場合セットの中にはいつた俳優の演技をも含める意味において現実とよぼう）のどの部分に、そしてどの瞬間に「粹」をはめるかという点にこそ映画の重大なる生命はかゝっているという問題である。もう一つことばを変えようと、映画創造者の映画眼というものは、日常生活においてわれ／＼がふつうは見のがすであろうようなもの、もしくはながめてもさほど感銘を得ないであろうようなもの——微細で微妙なものを現実世界からいかにして発見するかという点に、まづ第一の根本的な課題があるという意味である。

今日のいわゆる劇映画では、大勢はかゝる意味での映画の生命からしだいに離れつゝありはしないか。外國の映画監督も演出というものに、演劇演出家と同様に精進し、トーキー俳優としては舞台の出身者が優位を獲得し、舞台脚本の映画化もまた、最も殷盛をさわめつゝあり、トーキー初期において非難された当時とはまた別の意味で、もっと熟達した演劇の模写が行われているのではあるまいか。模写ということばが酷であるならば、演劇的な目で作られた映画が流行し、映画の発見による現実のながめ方の精神が衰えつゝあるといつてもよいのである。これはもちろん、映画の演技という命題にも関連することであるが、映画においては子役のしぜんな演技がしば／＼おとなの名俳優の演技よりもわれ／＼に感動を與えるという珍現象なども、つまりはすぐれた映画眼の監督によってしぜんな子どもの動作や表情の中からカメラの「粹」にはめてこそ発見されるような——そのようなさまざまな人間の秘密な顔かたちにとらえられた場合なのである。実は珍現象でもなんでもない。そういうものをかりに映画のリアリズムと名まえをつけようが、映画の発見と名づけようがそれはかつてである。だが要するにそれらは肉眼によつて、しかも現実という粹の中に存在する姿としてながめたのである。だが／＼に見過ぎされがちなような、もしくはその微妙なおもしろみや秘密が発見されたいような——そのような現実的断片や瞬間をとらえて映画の粹の中にはめて生かして見せる精神であつた。したがつて、かならずしもそれは俳優の演技にかぎらず、それはもちろん風景についても同じことなのである。それはけつして写真というような今日のことばでは表現できない精神である。むしろすぐれた映画眼の所有者でなければ現実の中から発見できないような、これを「映画の粹」を通じてなければわれ／＼にその発見を報告できないといったふうな——そのような対象に内在する秘密なリアリズム、秘密な美しさをつかむ精神である。

ジャック・
フェード

二

Jacque

Feyder

ベルギー

人のフラン

スの映画監

督。

スタンバー

グ

Joseph Von

Sternberg

(ハル)

ドイツ人。

アメリカの

映画監督。

リイ・ガ

ムズ

アメリカの

映画キヤメ

ラマン。

スペイン狂

想曲

アメリカ映

画スタンバ

ード作品、

日本公開は

一九三五

年。

女だけの都

外人部隊

共にフェー

ド

が監督した

フランス映

画。日本公

開は前者が

一九三〇年、後

者は九三年

それぞれ外

國映画ベス

トテン第一

位、第二位

を得た名

作。

小津安二郎

(志手)

東京の人。

大船の監

督。

私はかつてジャック・フェードの藝術を論じて、昔のスタンバーグの映画美に言及したことがあ

るが、そのとき、スタンバーグの美は対象に内在する美を発見するのでなくて、彼は彼の創造したあ

みをとおして対象の美を描くと言ったことがある。かつて英氣みなぎり時代のスタンバーグも、た

しかに映画美の新たな創造に貢献した輝かしい人物であったことにまちがいはない。しかし、ひっ

さよう彼の映画美というものは、外見上はいかに私のいう意味における映画の「粹」を最も敏感に

意識していた映画藝術家の手法のごとくでありながら——実は彼こそは現実世界に内在する眞実の祕

密な美しさをえぐり取ったのではなかったのである。スタンバーグがリイ・ガムズと協力して作り

あげたあまたの画面はたしかにわれ／＼を恍惚たらしめる美しさをもっていたが、実をいうと彼の意

識していた映画の「粹」はあんがい甘かったのである。たとえば、彼の欠点を最も端的に表わした衰

類的の「スペイン狂想曲」の各画面を思い出すがい。それは、つまり文章にたとえていえば、彼は

あまりにも美辞麗句に満ちた、内容空疎な大文章を書きあげたにも等しかった。そうしてその甘さは

既に彼の全盛時代の数々の名作にも既に影を潜めていたのである。たとえば、ジャック・フェードの

作りあげる画面を想起するがい。「女だけの都」でスペイン兵が乱入する過去の思い出の場面、も

しくは「外人部隊」の中で主人公の青年が友と連れだつて夜の町へ出かけ、その区画の入口で前方に

けんかかなにか始まつていて、女たちが騒いでいる光景をながめるも、や／＼とした場面を思い出すが

よい。画面はスクリーンという「粹」にはめられていながら、「粹」を感じさせるような意識された

構図ではない。さわめてナチュラルな輪郭とナチュラルな人物たちの動きによって、一見混乱した画

面のようで、実はちゃんとコンセンストレーションが成し遂げられている。焦点が鮮明である。これを

もう一つ説明すればスタンバーグ映画における移動撮影（X27）もしくは「上海特急」を、フェー

ドの「女だけの都」において、あの廣場の場面で縦横に駆使された移動撮影の妙味と比較してもよい

のである。移動撮影の妙味は、観客をして移動撮影だということを意識せしめない一点にある。同様

に映画は「粹」によって制限され、「粹」に制限されることによってこそはじめてその価値を生産す

る藝術様式にもかゝらず、「粹」を観客に意識させるような映画作品はけっしてすぐれたものとい

えないのである。もっとも「粹」を意識させる手法にも上下はある。日本映画に例をとれば、「粹」

を意識させながらも、日本無声映画としては最高の段階に達したものが、かつての小津安二郎の諸作

品であり、ほとんど「粹」を無視することによって、かえって「粹」の存在を露骨にむき出して失敗

しているのが、新協劇團の「初恋」である。

〔続映画と批評〕による）

研究の手引

- 一、本文に使われている「映画の粹」ということばの意味について話しあう。
 - 二、次のことばが説明できるようにする。
 - イ モンタージュ
 - ロ クローズアップ
 - ハ カメラアングル
 - 三、「現実世界（この場合セットの中にはいった俳優の演技をも含める意味において現実とよぼう）のど
- の部分に、そしてどの瞬間に「粹」をはめるかという点にこそ映画の重大なる生命はかゝっている。」と
- いう、作者の採りあげた問題についてめい／＼の意見を發表する。

四、次のことについて、簡単にめい／＼の感想をまとめる。(四〇〇字以内)

(イ) 演劇的な目で作られた映画

(ロ) 映画の発見による現実のながめ方

一一 トンネル

笠原良三

笠原良三、本名は良三郎。明治四十五年(一九一二)栃木縣で生まれた。シナリオ作家。

「丹那トンネル殉難者の碑」――

字幕『丹那トンネル――着工大正七年より完成昭和八年に至る――悪戦苦闘十六年、実に、丹那貫通の歴史こそわれ／＼日本人の持つたくましさ建設的情熱の象徴である』

遠い山々の風景

谷川のせゝらぎ――

その上に字幕『大正十三年の早春』

山の頂

早春の日のみなぎった丹那盆地が、一望のもとにひろがっている。軽い身じたくをしたふたりの青年、川西技手と木下雇員とが、盆地の方を見おろしながら立っている。

川西は正面に見える山々を指さして、

「……あの正面に見えるのが滝地山だよ。」

木下、うなずきながら、

「熱海口の工事は、今、ちょうどあの真下ぐらいまで進んだそうですね。」

「うん、そうらしいね。……」

下の方から、ひとりの青年の登って来る姿が見える。

川西「あ、あれは相原君じゃないかな……あ、やっぱりそうだ。……おうい、相原君、相原君。」と手を振る。

呼ばれた青年、相原技手も気がついて手を振った。

近寄ると、相原笑って、

「やあ、こんなところで会おうとは思わなかったよ。あんなところをたずねようと思ってやって来たんだ。」

「そうか、そりゃちょうどよかった。」

「休暇をとってやって来たんだが、久しぶりで山を歩くのは氣持がいいね。」

木下がそばから、

「その後、熱海の方はどんなぐあいですか。」

「まあ、わりに順調だね。ずっと堅い地山にぶつかってるからね……」

「そうですか。……それに比べるとうちの方とさたひには、まるでお話になりませんよ。」

「あい変わらず出るのか。」

「出るのなんのって――」

川西「いや、きょうもね、水のことでもどうも盆地の方が氣になるんでちょっとようすを見に来たんだ。」

相原「そうか……しかし、べつに変わったようすも見えないじゃないか。」

「うん、たんぼの水もあい変わらずだ。」

「わからんな、まったく……」

川西、ゆううつそうに、

「わからん。……」

相原、ふと話題を変えて、

「その後、奥さん元氣かい。」

「あ、おかげさまでやっと山の中の生活にも慣れたらしいよ。」

「しかし、山の手のお嬢さまが、いきなりこんな山の中に連れて来られちゃ、ちょっとこたえるだろうな。まるで山賊にさらわれたようなもんだから……。」

と笑う。

「おい、ひどいことを言うな。……その代わりあいつはこっちへ来てたおかげで去年の大震災にも焼け出されずに済んだんだ。」

「そういえばそうだがね。」

「きょうはさきか、泊まっていくんだろう。」

「いや、日のあるうちに帰ろうと思っただよ。」

「水くさいこと言うな。たまには三島の飯も食って行けよ。富士の白雪でたい飯だぞ。」

三島トンネルの入口

既に疊築が終っている。坑夫たちの一組がはいって行く。

中から蓄電車に乗って、交替で休憩時間となった別の坑夫たちが出て来る。

坑夫たちは、入口附近の札場で、身につけた坑内作業服を脱いで返し、交換に労働時間を記入してもらった手帳をもらって帰って行くのである。(はいって行く者はこの反対だ。)

札 場

係りの者の横に、梶田組工事係の桐本がどっかりと腰を掛けていた。

坑夫たち一組の班長格である岩田の顔を見ると、

桐本「おい清さん、あの縫い返しのところなあ、二、三日前からだいぶゆるみだしてるようだから、きょうは手をつけない方がいいぜ。」

岩田「へい、なか／＼固まらないんで、弱りますねえ、あそこは。」

桐本「まあ、しばらく手をつけないで、うちっちゃつとした方がいいだろう。」

岩田「承知しました。じゃー」

坑 内

入口の蓄電車に乗り込む坑夫たち。



去年の大震災
大正十二年
九月一日開
東地方にお
こった大地
震。

疊 築
トンネルの
最後の仕上
げ。舗装。



蓄電車は坑内の闇に吸い込まれて行く。

三島口派出所の前

川西たちはいつて行く。

壁に「丹那トンネル工事進行表」が大きくはってある。

主任の高橋が設計の青写真をひろげ、そろばんで数字の計算に余念がなかった。

そこへ川西・相原・木下がはいって来る。

川西「たゞいま帰りました。途中で相原技手に会ったもんですから。」

高橋「やあ、いらっしゃる。」

相原「こんにはは。」

高橋「熱海の御一同は、お変わりないかね。」

相原「みんな元気ですよ。」

高橋「そうか、……きょうはゆっくりしていきたまえ。」

と言ふ、川西に、

「盆地の方はどうだったね。」

「いっこう変わりありません。柿沢川の水も減ったようす

はなし、たんぼも前と同じです。」

「ふうん、——すると、トンネルの中からまるで滝みたいにわき出て来る水は、いったいどこから来るんだらう。」

木下が遠慮がちに

「やっぱり蘆の水じゃないんですか。」

「そんなことはないよ。こつちも念のために蘆の湖測量所へ問いあわせてみたんだ。ところが蘆の湖の水は、工事の最初からちっとも減っちゃおらんのだよ。」

川西、おちついた口調で、

「水の正体をつきとめるためには、どうしても地質調査を徹底的にやってみる必要があると思うんです。」

「ふん……とにかく丹那というやつは一筋なわけじゃないかんで、——」

トンネルの内部（底設導坑の最奥部）

岩田たち坑夫が、降り注ぐ雨のような出水の中で作業に従事している。

ズリをトロッコに積み込む者、支保工を組む者。

同、「縫い返し」の附近

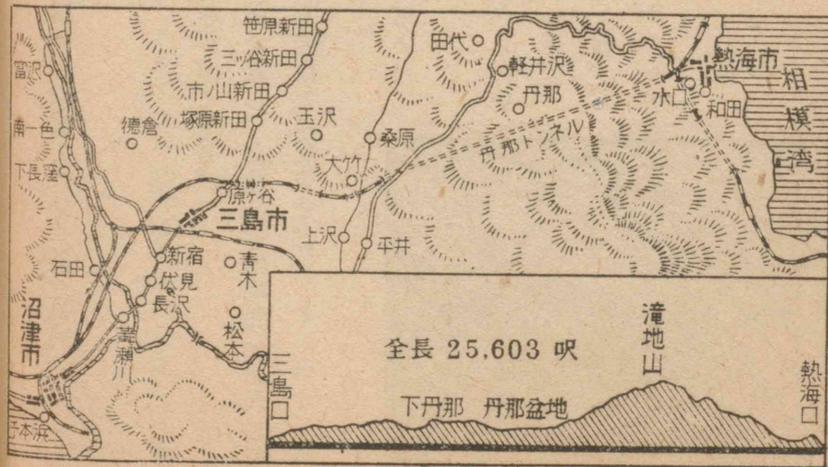
天井からばら／＼と砂礫が落ちてくる。

ばら／＼ばら、砂礫の落ちる数がふえる。

続いてゴーツと無気味な地鳴りの音と同時に、支保工のミリ／＼と山に押されて裂ける音。矢板のすさまじから、水が噴霧器にでもかけたように鋭くほとばしる。

蘆の湖
神奈川県箱根山にある湖。

ズリ
掘り出した土塊のこと。



一瞬、山鳴りの音が轟然雷鳴のごとく高まるとともに、支保工はけし飛び坑道はドッと崩壊する。同、坑導の奥

異様な音にぎよっとして立ち止まった一同。

一陣の猛烈な疾風が、出水をあらしのようになきつけた。五、六人のカンテラの火がいっせいに消える。

一箇所に身を寄せている一同。

轟々たる山鳴り。

ベ
タ
落
盤。

一同、口々に「逃げる。」「ベタだつ、ベタだつ。」「ぐずぐずするな。」などと叫びながら飛び出す。岩田、大声で、

「みんな、まっすぐ逃げちゃあぶねえつ。迂廻坑へまわれ。——迂廻坑から逃げる。」

迂廻坑の入口

一同必死に逃げ込む。

トンネル入口

桐本・木下・札場の係、その他働きの人夫たちが、異様な音に驚いて走って来る。

高橋の官舎（電話口）

けたましくなるベルの音。

居 間

食事をしていた高橋・川西・相原たち、はっとする。

電話口

高橋、受話器をはずし、

「もしく、——なに、崩壊。」

居 間

高橋の声に、思わず立ち上がる川西・相原。

トンネル入口

しだいに数を増す群集。

山鳴りは間欠的に起って、トンネルのコンクリート巻に轟々と反響する。

桐本が「あぶねえからはいっちゃだめだつ。」と叫びながら、人夫たちを指揮して入口になわを張っ

ている。

迂廻坑の中

水の中を逃げて来る坑夫一同。

カンテラの火がチラ／＼と水に映って凄惨の気が漂う。

とつぜん先頭に立った坑夫が、うめくように叫ぶ。

「おい、いけねえ、水がこっちへ流れて来た。」

逆流して来る水。

「こりや、迂廻坑もやられたぞ。」

「だめだ、おれたちは出口をふさがれちゃったんだ。」

「なにくそ」という意氣で二、三人の若い坑夫が勇を鼓して進んだが、轟然たる山鳴りの音に、足がすくんで立ち止まってしまふ。

そのとき、岩田が、

「みんな騒ぐな、おちつけ、おちつけ、おちついておれの言うことを聞け。」

一同、青ざめた顔で岩田を見る。

「出口がふさがれたといつてあわてることはねえ。あわてると助かるものも助からなくなるぜ。さき一昨年、熱海で生き埋めになったなかまは、八日めにみんな無事に救い出されたじゃねえか。

——この中には救助隊に行った者もいるはずだ。」

坑夫のひとり、

「だけど兄さ、あんときにゃ水がなかったよ。こんな水はなかったぜ。」

岩田、かぶせるように

「心配するな、水より先になかまが助けに来らあ。」

一同は沈着な岩田の態度に、なにかほっとした氣持になった。

「助けに来るまでどんなことがあつてもがんばるんだ。いいか。だれか切場へ行って足場をこさえる板を集めて来い。カンテラはたいせつに使わなくちゃいけねえ。ついているのは吹き消してこつちへ集めろ。」

一同は岩田の命令どおりに従つた。

天幕の中

桐本・高橋・川西・相原、そのほか号令や世話役たちが協議している。

桐本「とにかく、水がおさまらなさま、手のつけようがありません。」

川西「それじゃ泥の上へ板を渡して行ける所まで行ってみたらどうでしょう。」

高橋「そうだな、この際それよりほかしかたがあるまい。」

迂廻坑の中

水は既に、足場の板までひた／＼とふえていた。

岩田は、じっと目を閉じている。

入口附近

夜が白々と明けてきた。

お、ぜいの群衆の中に、たきだしをてつだう川西の妻礼子の姿。

天幕の中

高橋・川西・木下その他沈痛に待機している。

迂廻坑の中

水は足場をはるかに越している。氣息えん／＼たる一同。

岩田は、苦しげに息を続けながら、消えんとするカンテラの火をたよりに手帳に文字を書きつけてくる。

だん／＼細くなるカンテラの火、ついに消える。

岩田の飯場

岩田の写真と遺骨が安置され、香煙が静かにたちのぼっている。

高橋が焼香を終り、続いて川西が焼香する。岩田の妻は、遺児の君子と鉄太郎がすわっている。

高橋は、はるに一礼して、

「このたびは、どうも、なんと申しあげてよろしいか……ほんとうにお氣の毒でした。」

川西もそれにならう。はる、頭を下げる。

高橋「あんたも、あまり深く心落しせんようにな……これからなんかと、御苦労だろうが、鉄道の方としてもじゅうぶん御面倒をみてあげることになっているから……」

「はら、ありがとうございます。」

高橋「いや、惜しい人をなくしたよ。」

はる、涙をふいて、

「あの人も、山好きで、あっちこっちと飛び歩いていたんですから、山で死ねれば本望でござんしやう。——たゞ道連れになった他のかたへには。」

高橋、黙然として返すことばもない。

はる、一礼すると静かに立って遺骨の前に供えてあった一冊の手帳を持って來た。そして高橋の前にさし出し、

「胸のかくしにこれがいってました。どうぞごらんすって……」

高橋、手帳をひろげて見る。手帳は水のためにいたましくしみの跡がにじみ、岩田が苦しい息の下で書いた鉛筆の走り書が読める。

「——左に遭難者の氏名を記す。

岩田清吉(栃木縣)・羽田文作(山梨縣)・伊藤唯次(大分縣)・三島清太郎(廣島縣)……………計十六名』

と書き出してある。

高橋は胸をつかれたように、

「うむ、遭難者の出身地を調べたんだなあ。」

川西の目にも光るものがある。

新聞記事

『丹那工事中止すべし』——(時事新報社説欄)

『世界一の難工事、悩みの丹那トンネル』——(東京日々新聞社会欄)

その他、丹那工事を非難する新聞記事。

議會、鉄道予算分科会

議卓の一方には、議員から選出された予算委員が着席し、他方には政府委員・建設局長が着席して
る。

両側と直角の位置に主査・副主査が着席し、壁側に並べられたいすには幹部技師が控え、少し離れて新聞記者たちが傍聴筆記をしている。予算委員が立って發言中である。

「……かくしてこのまゝ掘さくを続けるならば、地質はますます悪化し、工事の危険性が著しく増大することは火をみるよりも明らかであります。過去において一再ならず坑内をおびやかしたる事

故は、いつ、ふたゝびその惨禍をくり返すか、はかりがたいのであります。われ／＼は既に大正十年、熱海口の大崩壊事故において十六名の従業者を圧死せしめ、今また三島口において十六名、合計三十名を越える尊い犠牲者を奪われている。しかも、工事竣工の予定期限は明年に迫り、工事費は、既に当初予算三百万円を、はるかに超過している始末である。われ／＼はかゝる工事に対しては、もはやこれ以上の國費を注ぎこむことは許されないと考えるのであります。私は丹那工事全部をうちきっていただくよう提言します。そうして現在の箱根越え東海道線を複々線とする電化計画を一日も早く実現していただきたい。」

建設局長、主査に会釈して静かに立った。

「現在の御殿場・山北・沼津間は、山岳重疊として路線に迫っており、地勢上どうしても複々線にすることが困難であります。もともと、仮に複々線が可能であるとしても、現在あと押し機関車を使用する事実にみても明らかでありますように、その勾配は四十分の一の急勾配でそうとうなる牽引力を必要といたします。しかも速度においても多大なる制限を受け、また毎年のごとく雨期になると路線をおびやかす鮎津川の氾濫を考慮に入れますと、とうていその將來を期待することができません。——今や、國鉄幹線は、明らかにゆきづまりを示しつつあります。——これが充実は産業経済上一日もゆるがせにすべからざる重大事であります。この際省としましては、あくまで丹那路線を貫通させまして、一日も早く國鉄幹線を充実すべく総意を決した次第であります。……どうか本追加予算のお認めを願いたいとぞんじます。」

と、このとき、他の予算委員が猛然と立った。

「たゞいま、建設局長が口にせられたようなことを、われ／＼は大臣もしくは関係者諸君から何度聞かされたかわからるのである。ところが工事そのものはいまだ目鼻がつかぬばかりか、反対にますます悪化するばかりじゃないか。これでは政党はむろん、國民大衆が喧々轟々として非難するのは当然である。いさぎよく工事をうちきつたらどうですか。」

建設局長「……私は強き確信をもって申しあげます。——過去六年の悪戦苦闘はけっしてむだではなかったと思えます。——二度にわたる大事故は、われ／＼が従来丹那に対していただいておった觀念を根本的にくつがえしました。加うるに今回、地質学六博士の調査によって、はじめて断層の正体をつきとめることができたのであります。断層の間に存在する粘土質によって、地下水があたかも自然の一大貯水池のごとくたくわえられ、これが、あの一秒間十石というおびただしい出水の原因であつたのであります。」

「——われ／＼がたゞいま工事に対する再出發を声明し、その前途に確信を持ちえますのは、このように難工事の原因を明らかにすることができたからであります。断層いかに恐るべきものでありましても、既にその実体を把握しましたからには、われ／＼はこれに対し敢然突進するの勇猛心をいなくもありません。われ／＼はこゝに従來の工法を一てきし、丹那征服に最も有効適切と信ずる新工法を見いだすことができました。……その一端を申しあげますと、セメント注入法であります。導坑の最奥部に、さく岩機をもって放射状に穴をあけ、これにセメントの溶液を圧さく空氣の圧力で吹き込むのであります。かくして柔らかい地層を固めたうえ、これを掘るのであります。」

予算委員「いかん、いかん、そんな單純な工法であつた難工事を突破できるはずはない。」

建設局長「われ／＼はセメント注入の効果を信じています。しかし、万々一それが有効でない場合でも、第二、第三の工法を準備しております。もし世界のあらゆる工法が効果を發揮せずとも、われわれは断じて工事を放棄いたしません。丹那独自の工法を研究しつゝ、あくまで前進するのみであります。われ／＼の技術家はかならず石にかじりついてこの難工事を征服すると思ひます。私はそれを信じます。……」としだいに熱を帯びて、

「もはやこれ以上のご説明は申しませぬ。われ／＼がこゝで言明しうることは、國鉄幹線將來のため、是が非でもこのトンネルは貫通せしめねばならぬという、たゞ一言であります。技術者のすべては氣魄きぼくを持つておるのです。彼らは、今や、一丸となってこの難局を打破すべき悲壯なる決意をもって再出発を誓つておるのであります。技術者たちの根本理念とするところのものは、常に丹那抜くべし、断じて放棄すべからずとの烈々たる闘志であります。」

予算委員たち、しだいに圧倒され、黙つたまゝでいる。

トンネルの内部
夕立のごとき出水を浴びつゝ、さく岩機を打ち続けるさく岩夫の姿。

（建設局長のことばの後尾をこの場面にかぶせる。）

「工事進行表」の線画

（東口六千八百フィートより八千六百フィートまで、西口五千四百フィートより七千フィートまでそれ／＼掘さくが進行してゆく状況を示す。）

三島派出所事務室

川西が高橋・木下などといっしよに窓口に立って、窓外を見ながら話している。一同の顔には焦悴せうさいの色が濃い。

高橋「川西君、きょうは早く帰つてぐっすり眠つたらどうだ。五日も詰めさうじゃ、からだを持たんよ。」

川西「平氣ですよ。これくらい。」

高橋「強情ははらないで帰りたまえ。それに奥さんも初めてのお産で心細がつているだろう。」

「実家の母が来てくれますから。」

「まあそう言わずに、たまに一日くらいはそばにいてやってみたまえ。喜ぶぞ。」

「……」

「赤ん坊の名まえ、なんとつけたね。」

「徹とほというんです。」

「徹、……貫徹の徹か。」

「えい。」

「川西徹、川西徹か、……ほう、こりゃ縁起のいい名まえだ。」

と愉快そうに笑つた。と、そこへ入口から岩田の妻はるが、君子・鉄太郎を伴つておす／＼とはいつて来た。三人は貧しいながらも一張羅いちやうらの晴れ着を着ている。

「ごめんくださいまし。」という声に高橋は氣づいて、

「あゝ清さんところの、……いやあよく来たね。」

はる「——その節はいろ／＼とごやっかいになりました。……おかげさまで故郷のお葬式も無事に済ませてまいりました。」

「それはよかったね。」

「故郷の親たちも心配して、あっちで暮らすように引き止めましたんですが、この子だけは（と鉄太郎に視線を向け）なんとかして鉄道の学校へやりたいと思ひまして。……」

「なるほど。」

「私と、この君子は、こんどまたこちらの組の方で働かしていたくことになりましたもので、どうぞよろしくお願ひを。……」

「あゝそうかね、それは結構、結構。清さんもさつと喜ぶだろう。何かまた困るようなことでもあったら、いつでも相談に來なさいよ。」

「はう。」

川西もそばから優しく、「まあしっかりやるんだね。」

はる「じゃごめんなすって。——」と去って行く。

字幕『昭和五年』

川西の官舎、庭

かつて高橋のいた官舎である。（高橋は既に退職していない）りっぱに成長したみかんの木が、朝のうららかな光を浴びて枝もたわ／＼に実をつけていた。六つになった徹が、おとなの庭下駄をつっかけてみかんの木の下に立っている。

朝の道

見上げる山のみかん畑にも黄金の玉が輝き、道端の清らかな流れのほとりには、秋も末の可憐な野菊がそよ風に揺れていた。

川西が出勤の道を急いでいた。彼は主任の服装である。と一方から、岩田はると、すっかり娘になった君子、鉄道省員の制服を着た鉄太郎が来る。彼らは出会うと、

「おはようございます。」と頭を下げる。

川西「やあ岩田君か、りっぱになったね。見違えてしまったよ。」

はる「おかげさまで、これもこんど建設事務所の方へ勤めることになりました。」

川西「それはよかったね。」

はる、うれしそうに「これも皆さんのおかげで。」

鉄太郎「トンネルの方もいよ／＼貫通が近づいたそうですね。おめでとうございます。」

川西「いや、まだ／＼安心はできないよ。実際貫通してみるまでは。」

鉄太郎「でもあと余すところ両口合わせて三千フィートくらいだそうじゃありませんか。」

川西「うん、そこまで行ったには行ったんだが。……」

さすがに悪い氣持はしない面持である。

川西の官舎、居間（夜）

低く下げた電燈の下で川西が設計の仕事を続けている。かたわらに敷かれた寢床。

柱時計

九時半

柱時計

一時をまわっている。

茶の間

礼子が縫仕事をしている。かたわらに寝ている徹。

居間

川西、仕事を続けている。ようやく疲労が増してきた感じ。たばこに火をつける。遠くにわとりのときを告げる声が聞え、続いて柱時計が六時を打つ。川西は大きく背伸びをして、立ち上がって戸を練った。白い夜明けの光がさっとへやの中にさし込む。川西は大きく深呼吸をして戸外を見る。

茶の間

徹のそばにふだん着のまま寝入っていた礼子、ふと目をさまし起き上がって居間の方をうかがう。

「あなた、まだお起きになっただけじゃないか。」

居間

川西、ふすま越しに、「うむ、これから一寝入りしようと思っただけだよ。」

礼子はいって来て、「あ、もう夜が明けましたのね。（心配そうに）あなた、そう毎晩のように徹夜なさっちゃおからだにさわりませうわ。」

「すまないが、熱いお茶を一杯入れてくれないか。」

「はい。」と礼子が立とうとしたときだった。

轟々と地軸をゆるがす遠鳴りとともに、突如へや全体が激しい震動にゆるぎだした。（昭和五年十一月二十六日、北伊豆地方を襲った大地震である。）

あっと息をのんで本能的に茶の間に駆け込み徹を抱き起す礼子。揺れ落ちる柱時計、みる／＼うちに亀裂が入り、はげ落ちる壁土、どっと倒れる本棚、散乱する書籍。

親子三人はかろうじてあいている雨戸から庭の外へ逃げる。

揺れる樹木、揺れる電線

飯場

揺れる、揺れる。飛び出す坑夫たち。女ども、老人……。

トンネル内部

轟々、轟々、響く。揺れる。明滅する電燈。ついに崩壊する坑道。逃げまどう四、五人の坑夫。その前面に崩壊が起きた。瞬間恐怖に引きつった坑夫の目・口・腕・顔、支保工がはり裂ける。土砂が落ちる。岩石、噴水、揺れる、揺れる。奔流、奔流、轟々、漠々。

静かなる山々

川西の官舎附近

礼子は徹を抱きしめ、川西のひざにすがったまゝわれを忘れて大地にひざまずいていた。ようやくにして大地震はやんだのである。

ふとわれにかえった川西は、「トンネルが心配だ。……見てくる。」と言ひ捨て、官舎の中に走り込

む。瞬間、小さな揺れ返して官舎がゆらぐ。礼子思わず、「あ、あぶない、あなた。」と叫ぶ。黎明の道

制服に着換えた川西が走って行く。心痛に顔青ざめてひた走りに走る。
トンネル附近

走って来る川西。と、トンネルの方から木下と赤沼が走って来た。

「おゝ。」と氣づいた川西は走り寄って、

「トンネルは、……現場はどうしたか。」

木下、無念そうに、「やられました。」

新聞記事

『北伊豆地方大地震に襲わる。』

『地震のため丹那トンネルまたも大崩壊。犠牲者四名。』

『震源地は丹那断層附近。』

『地表に姿を現わした丹那断層。』など。

丹那盆地

えん／＼と地面の上に亀裂を見せたすさまじい姿を現わしている。

川西の官舎

ひげぼう／＼とのび、落ちくぼんだ両眼をじっと閉じた川西が病床に横たわっている。はげ落ちた壁には應急の壁紙が張ってあるが、へやの中にはまだ大地震のあとを思わせるものがどこにも漂っ

ている。まくらもとには赤沼と木下が作業の報告に来ているところである。

川西はこっくりうなずいて、

「そうか……じゃまだ水は引かないんだね。」

木下「はあ、あい変わらず一秒間二十石を続けています。」

「そうだろうな。……（と何か自嘲するよう）一時的な湛水ならいざしらず、蘆の湖の二倍の水がそう簡単に減るわけではない……そんなことを聞く方がやばだな。……」

そこへ礼子と、その後から徹が来る。礼子が茶を入れ換えようとするのを見て、

木下「あ、もうどうぞ奥さん。……」と赤沼と目を見かわし、

「失礼いたしますから。……」

「まだおよろしいじゃございませんか。」

「はあ、でもまだ仕事が残っておりますから。……」

と川西の目をつぶっている間に、礼子にあいさつして木下・赤沼帰って行く。

徹「おじさん待ってよ。……」と木下のあとを追って行く。

礼子「あなた、おかゆができておりますけれど、あがりませす。」

「うむ……（と何か考えこみながら）ふたりは帰ったんだね。」

「えい。」と立ち上がり、茶の間からかゆの盆を持って来る。礼子、川西を抱き起し、すわりいいようにしてやる。

川西、礼子の給仕するかゆをすゝりながら、「……徹はどうした。」

「木下さんについて行ったようすわ。」

「お寺の幼稚園へは行かなかったのだね。」

「きょうは日曜ですから……」

「あゝそうか……（と寂しげな笑い顔を浮かべ）日曜だったのか、……現場には日曜も何もない。

……日曜のない勤務を、もう十年近くも続けたわけだな、ははは。」

礼子は黙って茶を入れている。川西は礼子のすることをじっと見つめている。

「礼子。」

川西、礼子にふと話しかける。

「ぼくはおまえにすまないと思っっている。」とぼつりと言う。

礼子、はっとしたように「何を言ってるの……変ですわ、きょうは……」

「おまえは結婚と同時にこゝへやって来た。……新婚旅行が六里の山道だった。……ぼくたちの青

春はトンネル工事に費やされてしまったんだ。……ぼくは、ぼくには仕事というものがあつた。し

かしおまえは家にいる者だ。まして都会に育った女だ。ときには芝居も見たかろう。にぎやかな通

りも歩いてみたかろう。……そう思うとぼんとうにすまない気がするんだ。」

「まあ、そんなことはありませんわ。でも私にだって、仕事があつたわけじゃありませんわ。あ

なたがトンネルと戦っていらっしやる間に、私だって徹を六つにしましたもの。」

「そうだったね。……（と涙ぐんで）いつか冗談のようにおまえに言ったことがあつたね。トンネ

ルが開通したら初列車に乗せておまえたちを東京へ連れて行ってやるなんて、……それもいつのこと

やら……遠い／＼夢になってしまったよ。」

礼子は久しぶりに聞く夫の優しいことがうれしかったが、氣力の衰えを悲しく感じて、

「そんな氣の弱いことをおっしゃっちゃいけませんわ。あなたらしくもない。もうお休みになつた

ら。あまりよく／＼といろ／＼なことをお考えにならない方がよろしいのよ。……元氣をお出しに

なつてね。トンネルはきつと貫通します。あたし信じていますの。……」

「……うむ。」とじつと沈黙している。そのほおに涙が光る。

派出所の前

ふたゝび闘志に燃えあがつた川西が、技手・技工組の桐本班のおもだった者たちを前に、現場会議をやっている。

「諸君、もう一度やってみよう。われ／＼に課せられた責任と使命とをもう一度果たそうじゃないか。今や丹那の難工事の声は全世界に傳えられて、全世界の技術家の目はいっせいにこの日本の一角に注がれている。それを考えるとぼくは全身の血がたぎる思いがするんだ。」

一同、黙って聞いていたがしだいに情熱を昂揚されてゆく感じが、その表情に表われてくる。

「諸君、諸君がかつて示してくれたあの火のような闘志をもう一度呼び起してくれ。そして、この手のつけられない坑道をもう一度掘り直そう。もう一度元氣を奮い起して作業の部署につこうじゃないか。」

瞬間、一同は沈黙したまゝでいる。と、その中から桐本が、何か深く感動した面持で、一同に

「皆さん、やろうじゃありませんか。……主任さんのおことばのとおりです。まったく今やめたん

じゃ國民に顔むけができなくなりませう。ねえ皆さん、もう一度がんばりましょう。」
次々に「そうだ。」「そうです。」「やります。」「がんばります。」「まったくだ。」等々の声が一同の中
から盛りあがってくる。

川西「……そうか、ありがとう。ありがとう。（と涙ぐんで）じゃみんな頼むよ。」

一同、感動的にうなずいて、それ／＼の持ち場の方へ散って行く。

轟然と爆破する音響

三島ボーリング作業

川西が立ち会っている。

熱海口搬出作業

相原が立ち会っている。

『丹那トンネル工事進行表』の線画

両口の掘さくが貫通寸前まで進んで行く。

三島口トンネル内部

切羽からズリを運び出している坑夫たち。と、遠くどーんとどーんとハッパの音が聞える。

坑夫一「あれ、ありゃ熱海のハッパの音じゃねえか。」

坑夫二「うんちげえねえ。ばかに近づいてきやがったぞ。」

坑夫三「もうあと百フィート足らずだっていうからな。」

坑夫四「そうか、さあこっちも負けずにもうひとふんばりだ。」

ふろの中

坑夫たちの会話。

坑夫五「きょうはおめえ、熱海のさく岩機の音がかん／＼聞えてきたぜ。」

坑夫六「なにしろあと三十フィートだからな。」

三島口詰所

主任室。壁にはられたぼろ／＼の『工事進行表』それを見つめながら、川西・木下・赤沼・桐本な
どが立っている。

川西、感慨深く「あと十五フィートか。……」

木下、緊張した面持で、「では行ってまいります。」

川西「うん御苦労だが頼む。」

木下「はっ、しかし笑を言いますと、なんだか少し不安な気がしないでもありません。」

「なぜだね。」

「もし坑道がくい違ってでもいたら、それこそ申しわけがたちませんからね。」

「ばかなことを言っちゃいかん。くい違いなんかありようはずがないじゃないか。測量責任者たる
さみが、そんな自信のないことどうする。」

赤沼もそばから心配そうに、「しかし先日熱海の測量だと十フィートばかりくい違いがあるなん
て言ってきましたし、どうも氣になって……」

桐本「まったく心配ですよ。」

川西「きみたちまでが何を言う。それは何かのまちがだよ。一時の測量上の誤差に違いない。いずれにしてもきょうのボーリングの結果ですべてが証明されるんだ。丹那工事十六年の総決算だ。……確信をもって行ってきたまえ。」

「はあ、じゃあ……。」とふたりにあいさつして去る。

赤沼、机上の電話を取り、「熱海の詰所願います。もしく熱海ですか。こちらは三島です。たゞいま測量責任者の木下技手がこちらを出ました。はあ到着次第お知らせ願います。すぐボーリングにかゝりますから。」

三島口トンネル内部

切羽にさく岩機がすえられた。川西と赤沼・桐本が立ち会っている。

熱海口トンネル内部

切羽に、相原・木下技手、熱海詰所の川原技手、ほか坑夫五、六人が待っている。

三島口

さく岩夫、ふり向いて、「よろしゅうござんすか。」

川西黙ってうなづく。さく岩機、壯烈な音をたてて岩層に食い入ってゆく。じっと見つめる川西。

熱海口

三島口のさく岩機の音が聞えて来る。緊張する相原・木下・川西。

三島口

さく岩機鳴り続ける。見つめたまゝ動かない川西。

熱海口

相原も見つめたまゝ立ちつくしている。緊張した木下の額に汗がにじむ。さく岩機の音。さく岩機の音。

さく岩機

生きもののように活動し続ける。

熱海口

さく岩機の音がしだいに大きく聞える。のみ先が一刻一刻近づいて来るのだ。

とつぜん一同の見つめる壁面の左下がかすかに震えだした。息づまる一瞬。壁面の一部がむくくと盛り上がったかと思うと、突如のみ先がぐっと顔を出した。

「おう。」と思わずうなる相原・木下。

三島口

さく岩夫がとつぜん機械を止めた。

赤沼「どうした、故障か。」

さく岩夫、にやりと笑って「突き抜けたようですぜ。」

赤沼「え。」と、思わず川西と顔見あわせる。

川西、やゝ心いそいで「すぐ抜いてみる。」

さく岩夫はうなずいてのみ先を引き抜きにかゝった。抜き終わった壁面にできた一点の穴。それを見つめる川西。と、まもなくその穴から熱海口の差し込んだ二インチの鉄管がぐっと出て来た。

「あっ。」と叫んで、鉄管の口に顔を寄せる赤沼。凝然と立ちつくす川西。赤沼は鉄管の口からかなたをのぞいて狂喜しながら叫び続ける。

「主任、見えますよ、見えますよ。……熱海口の火が……火が……」

新聞記事

『丹那貫通式、いよいよあす。』

熱海口、トンネル内部

既に疊築を終った部分に貫通式場が設けられている。紅白の幕。簡単なテーブルとベンチには工事関係者や來賓一同が着席している。一隅には岩田鉄太郎も立っている。坑内は増設された電燈で皎々たる明かるさ。

廣山現熱海建設事務所長が、今、大臣室と直通の電話で話しているところである。かたわらには相原が立っている。

廣山「それでは時間をあわせませす。(と時計を出し)たゞいま十一時二十六分、十一時二十六分。

……では正十一時三十分の御信号をお待ちいたします。』

と電話をさり、相原に

「相原君、スイッチを願います。」

緊張する來賓一同。

時計

セカンドがこち／＼と刻んでゆく。

大臣室

時計を見ていた計画課長、大臣に、「時間でございます。」大臣おもむろに爆発信号器に手を触れる。パツと光る新聞社写真班のフラッシュとともに大臣はボタンを押した。

貫通式場

信号受信器がジジーと鳴り響く。はっと息をのむ一同。相原は一礼して爆発スイッチに近づき、ハンドルを握る。そして力をこめて押した。

貫通点の壁面

一瞬、轟然と爆発する。とともに画面いっぱい硝煙が立ちこめる。

導坑の中

支保工が組まれていて狭い。足元に流れる水をけたてて、相原たちが進む。硝煙が薄く流れてくる。進むにつれて硝煙は次第に濃くなってくる。相原たちは進む。進む。

貫通点附近

硝煙がいっぱい立ちこめている。進む相原たち。

と、硝煙の間からぼんやりと人の姿らしいものが見える。だん／＼に近づく。それは川西を先頭に木下・赤沼・桐本その他であった。

相原、感激の絶頂で、「川西君。」と駆け寄る。

川西も「お。」と近寄り、ふたりは手を握り、ひしと抱きあう。

川西のほおに、相原のほおに、止めどない涙が流れ落ちた。

Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 24, 1949)

完成した丹那トンネル熱海口
下りの特急が矢のようにトンネルの中に吸い込まれてゆく。
三島口

特急が出て来る。すれ違いに上り列車がトンネルの中へはいってゆく。

(北條秀司原作「丹那トンネル」——雑誌「シナリオ文藝」による)

研究の手引

- 一、次のことについて話しあう。
 - (イ) 印象的な場面
 - (ロ) シナリオとしての特徴がよくでているところ。
- 二、おもな登場人物の性格と、工事のうえでの役割とを調べる。
- 三、丹那トンネル完成までの経過を図表に作ってみる。
- 四、めい／＼小説一編を選んでシナリオ化してみる。

○ 映画

教育文化研究会

会長 国立国会図書館館長
主幹 東京教育大学教授

國語科編集委員

東京教育大学附属中学校教諭
東京都立第一女子高等学校教授
成蹊大学 教授
東京都立第十高等学校教諭
東京教育大学附属高等学校教諭
同
お茶の水女子大学附属高等学校教諭
東京都目黒区立目黒第八中学校教諭

金 森 徳次郎
石 山 脩 平

長谷川 敏 正
渡 辺 茂
飛 田 隆
鳥 山 榛 名
和田 邦 五 郎
和 田 健 三
宮 崎 三
稲 村 テ イ
大 村 浜

- 一、出版権設定登録済
- 二、意匠登録出願中
- 三、無断轉載を禁ず

昭和二十四年七月十五日 発行
昭和二十五年二月一日 再版印刷
昭和二十五年二月五日 再版発行



「國語」高等一年(一)
定価金十八円八十銭

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育文化研究会

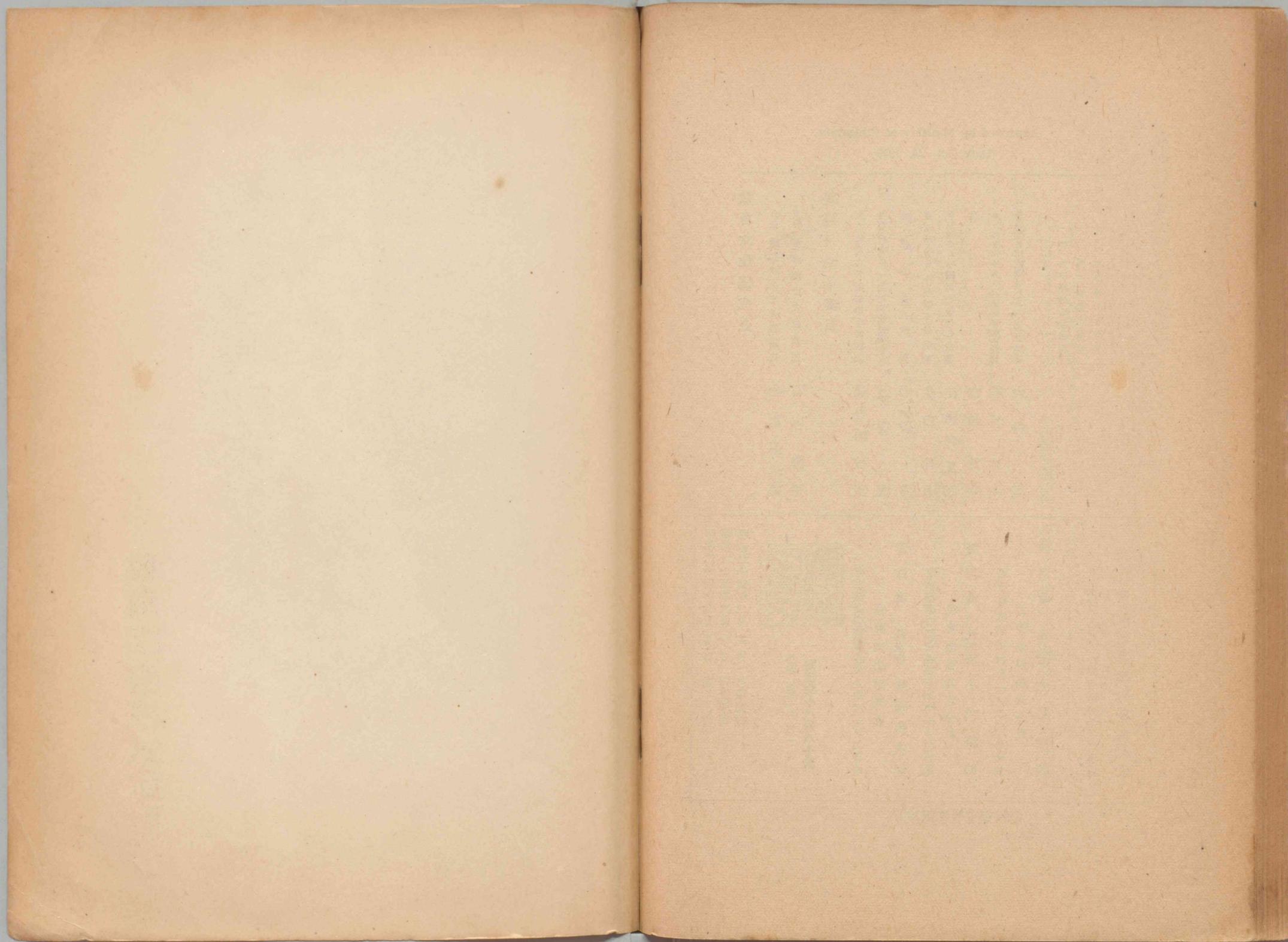
著 者 代表者 金 森 徳次郎
東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社

発 行 者 代表者 小 松 謙 助
東京都北区稻付町一ノ二〇八番地
二葉印刷株式会社
印 刷 者 代表者 大 野 治 輔

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
発 行 所 教育図書株式会社

教科書番号高國1007

昭和25年度用





教育図書株式会社

広島大学図書

0130449680

